

わかりやすいヨハネの黙示録

参考資料：新聖書注解 いのちのことば社

ヨハネの黙示録 メリル・C・テニイ著 有賀寿訳 聖書図書刊行会

イエス・キリストの黙示 ジョン・F・ワルブート著 山口昇訳 いのちのことば社

1：1－8 はじめの言葉

1. イエス・キリストの黙示 1：1－2

黙示とは、隠されているもののおおいが取り除かれて表わされることを意味しており、特に神の啓示が超自然的幻によって示されることです。「イエス・キリストの黙示」は、神からキリストに与えられ、キリストは御使いを通してヨハネに示されました。ヨハネはキリストから受けた黙示を直ちに書き記し、あかししました。ヨハネの黙示録は他の黙示文学のように偽名による幻想的創作ではありません。ヨハネが実際に見聞きした神のことばとイエス・キリストのあかしのすべての事を、この書で証言しているのです。

2. 幸いな人々 1：3

神は黙示録を通して私達に「幸い」を与えようとしておられます。この神の幸いは①「この預言のことばを朗読する者」（何度も注意深く読む者）、②「それを聞いて、そこに書かれていることを心にとめる人々」（聞いて、しっかりと受け止め、みことばに応答して生きる者）に与えられます。「時」（カイロス）とは、神がご計画の中に定めておられる時点を意味しています。即ち、神が定めておられる終わりの時が近づいており、神に忠実な者には、神の永遠の祝福がまもなく与えられるのです。

3. 三位一体の神 1：4－5

ヨハネはアジアの7つの教会に挨拶を送ります。「7」は完全数であり、7つの教会へ書き送られる形で、黙示録は全教会に向けて書かれています。そして、三位一体の神の恵みと平安を読者に祈ります。「常にいまし、昔いまし、後に来られる方」とは永遠に生きておられる父なる神を表します。「御座の前におられる七つの御霊」の7も完全数であり、聖霊なる神のことです。もう一人の子なる神、イエス・キリストは神の啓示の「忠実な証人」、「死者の中から最初によみがえられた方」です。キリストは死者の中から復活した最初のお方であり、昇天して今も天で生きておられる救い主です。また「イエス・キリストは私達を愛して、その血によって私達を罪から解き放ち、」私達に罪からの救いを与えてくださいました。

4. キリストの再臨 1：6－8

キリストは救われた者をご自身の「王国」の民としてくださいました。神の国の民はキリストによって贖われた者達により構成されており、彼らは神の国の「祭司」として、永遠に神に仕えます。終わりの時に、キリストは雲に乗ってすべての人に見える形で来られます。その時、キリストに敵対していた者は、彼を見て後悔し嘆きます。なぜならキリストによりさばかれなければならないからです。けれども、迫害に苦しんでいたキリスト者達はこの日を待ち望んでいます。彼らにとってはキリストの再臨は救いの完成の日であり、正しい神のさばきが下される日だからです。神は「アルファ（初め）であり、オメガ（終わり）である」お方です。神は永遠のお方であり、世界の初めと終わりを宣言する権威を持っておられるお方です。

1 : 9 - 20 幻

1. 手紙を書けとの命令 1 : 9 - 11

この手紙の著者ヨハネは自らの名を名乗り、自分は読者と同様、イエスを信じ神の国に生きるゆえに苦難と忍耐にあずかり、流刑とされてパトモス島にいることを伝えました。パトモス島はエペソの南西 100 キロにある島で、ヨハネはドミティアヌス帝(81-96 年)の迫害で流刑とされました。ヨハネは主の日に、神を礼拝する中で御霊に感じ、幻を見、ラッパの音のような大きなイエスの声を聞いたのでした。イエスはヨハネに、あなたの見ることを巻物に記して、七つの教会、エペソ、スミルナ、ペルガモ、テアテラ、サルデス、フィラデルフィア、ラオデキアに送るようにと命じました。7 は完全数なので、七つの教会はすべての教会の代表です。

2. 栄光に輝くキリスト 1 : 12 - 16

ヨハネは自分に語りかける声を見ようと振り返ると、七つの金の燭台の真中に立つ栄光に輝くキリストの姿を見ました。12-16 節の表現は、ダニエル書やエゼキエル書に出てくる救い主と父なる神の姿が用いられています。雪のように白い髪の毛はキリストの聖さを、燃える炎のような目は罪に対する怒りを、口から出る鋭い両刃の剣は神のことばを、太陽のように輝く顔はキリストの栄光を表しています。キリストは山上の変貌において、一度ご自分の栄光の姿を現されたことがありましたが、天におられるキリストは栄光の神の姿でした。

3. 死んでよみがえられたキリスト 1 : 17、18

ヨハネは栄光に満ちたキリストの姿を見たとき、その足元に倒れて死人のようになりました。キリストの姿は、地上に来られた時のへりくだられたキリストの姿とはあまりにも変わっていたのです。人は神の栄光を見ることができないので、ヨハネは倒れて死者のようになったのです。しかし、キリストは右の手をヨハネにおいて「恐れるな」と言って、ヨハネを励まし強めました。キリストは父なる神と同じ永遠の神、十字架上で死なれたが、よみがえられて今も生きておられる救い主です。そして、死とハデスのかぎを持つ審き主です。

4. 七つの星と七つの金の燭台 1 : 19、20

キリストは再び手紙を書くようにヨハネに命じました。19 節はこの書のアウトラインを示しています。—あなたの見た事(1 章)、今ある事(2-3 章)、この後に起こる事(4-22 章)— キリストの右の手にある七つの星は七つの教会の御使いを表すと言われます。それは完成された天上の教会を表しています。教会はキリストの御手の中で完成することができるのです。また七つの燭台も完成された天上の教会を表しています。教会の真中にはイエス・キリストが立っておられ、教会はキリストの栄光を輝かせる世の光なのです。

2 : 1 - 7 初めの愛から離れてしまったエペソ教会

1. エペソ教会への手紙 2 : 1

エペソの町は交通の要所であり、商業が盛んな地方総督府のあるアジア州最大の都市でした。ここには世界の七不思議の一つであるアルテミス神殿があり、宗教的売春が行われる不道德な町で、魔術も盛んでした。パウロはここに2年滞在して伝道し、テモテはエペソ教会を牧会しました。7つの教会への手紙はいずれも「教会の御使いに書き送れ」と表現されていますが、実際は教会に対する手紙です。七つの星、七つの燭台はいずれも、キリストの御手の中で完成する教会の姿を現しています。教会は世の光であり、キリストは全教会の間を巡り、常に見守っておられます。そのキリストが権威を持って「言われる」のです。

2. エペソ教会への賞賛 2 : 2、3

キリストは、エペソ教会の「行いと労苦と忍耐」に対して賞賛を与えられました。キリストは、教会がご自分のために払った犠牲を見過ごしにされず、知っておられます。エペソの信者が忍耐したのは、キリストの「名のため」でした。神の御名のために生きる者は、御名のために忍耐するのです。そして、神はそのような者が疲れることがないように助けてくださいます。またエペソ教会は、使徒と自称して入り込んできた悪い者達を試して、その偽りを見抜きました。エペソ教会は聖書の真理を愛した故に、真理から外れて偽りを教える悪い者たちを我慢することができなかったのです。

3. 非難すべきこと 2 : 4、5

キリストはエペソ教会が「初めの愛から離れてしまった」ことを指摘し、非難しました。教会は、最初信じたときの神に対する愛がしだいに冷えていき、霊的熱心さから遠ざかって行ったのです。教会は異端的な教えを見抜くあまり、神学的問題に関心を注いだ結果、頭でっかちの教会になってしまったのかもしれませんが。教理的にいくら正しくても、神への愛が失われたら、死せる正統主義になってしまいます。キリストはそのような教会に対して、悔い改めを迫りました。悔い改めはまず、「どこから落ちたかを思い出す」ことから始まります。そして、神の前に罪を告白し、方向転換(悔い改め)をし、言葉の悔い改めだけではなく、「初めの行い」を実際に行うことです。もしエペソ教会が悔い改めなければ、キリストは教会をさばき、教会は世の光としての使命をもはや果たさなくなってしまうのです。

4. 耳のある者 2 : 6、7

キリストは再び、エペソ教会に対する賞賛を送ります。それはキリストが憎んでいるニコライ派の人々の行いを、教会も同様に憎んでいることです。ニコライ派とは2:14、15に出てくる偶像礼拝と不品行を教えるバラムの教えを信じる人々のことです。教会は愛と真理の両方を大切にする必要があるのです。最後に「耳のある者は御霊が諸教会に言われることを聞きなさい。」と言われます。御霊が言われることを聞くためには、信仰がなければできません。また「御霊が諸教会に言われる」とは、この手紙はエペソ教会だけでなく、全教会に対するものであるということです。信仰生活は戦いの連続です。けれどもキリストはすでに勝利され、キリストに従う者にも勝利を与えてくださいます。そして、勝利を得る者に、キリストはパラダイスにあるいのちの木の実を食べさせてくださるのです。(22:14)

2：8－11 迫害されているスミルナ教会

1. スミルナ教会への手紙 2：8

エペソの北 55 キロに位置するスミルナは、エペソに次ぐアジア州第二の都市でした。スミルナは陸地に深く入り込む港があり、主要道路の終着点でもある商業都市として栄えました。町にはローマの女神のための神殿があり、ローマに対して忠誠を尽くしていたので、ローマもこの都市を保護しました。現在はイズミルという名前に変わっていますが、イスタンブールに次ぐ第二の港を持つ人口 300 万人のトルコ第 3 の都市として栄えています。スミルナの教会がどのように誕生したのかについては聖書に記されていませんが、パウロのエペソ伝道を通して、スミルナにも福音が宣べ伝えられたのでしょうか。イエスは「初めであり、終わりである」永遠の神として、また「死んで、また生きた」救い主として、スミルナ教会に語られました。

2. 苦しみと貧しさ 2：9

スミルナはローマに忠誠を尽くす都市であったため、アジア州におけるクリスチャン迫害の中心地となりました。「カイザルは主です。」と宣言することを拒否したクリスチャンは迫害を受け、村八分となり、仕事を失い、食べ物にも困る貧しさを経験しました。また、迫害はユダヤ人からも起こり、ユダヤ人からののしられる苦しみをクリスチャンは味わいました。イエスは、ご自分を主と告白しないユダヤ人は、実際には神の民ではなくサタンの子供だと言われました。そして、迫害による苦しみと貧しさの中にいるスミルナのクリスチャンに対して、「しかし、あなたは実際には富んでいる。」と語られました。彼らはキリストのために苦しみを受ける中で、霊的に富んだ者となり、信仰の恵みを経験していったのです。

3. 死に至るまで忠実であれ 2：10

イエスはさらなる迫害に対して「恐れてはいけない。」とスミルナ教会に命じました。クリスチャンを迫害するものの背後には悪魔がいました。そして、悪魔はクリスチャンを試みるために、ある人たちを牢に投げ入れようとしていると言われました。しかしその苦しみは十日間であるとも言われました。十日間とは短い一定の期間という意味です。だから「死に至るまで忠実でありなさい」とイエスはスミルナ教会を励ましました。クリスチャンの信仰の忠実さは、死ぬ時に明らかにされるのです。そして死に至るまで忠実である者に、イエスは永遠のいのちの冠を天国で与えてくださいます。ヨハネの弟子であったスミルナの司教ポリュカルポスは、ユダヤ人に訴えられて、155 年に 90 歳で殉教しました。彼は死に至るまで忠実なイエスの弟子でした。

4. 勝利を得る者 2：11

最後に、エペソ教会に語られたと同様に、「耳のある者は御霊が諸教会に言われることを聞きなさい。」と言われます。私達は、信仰の耳を持たなければ、御霊が語られることを聞くことができません。今日も聖書を通して私達に個人的に語られる御霊のことばを、信仰の耳で聞く者となりましょう。聖書は肉体の死を第一の死と呼び、最後の審判の時に受ける神の審きを第二の死と呼んでいます。キリストの救いを受けた者は、罪と死に対して勝利を得た者なので、第一の死を経験しても、第二の死を経験することはない、いのちの冠をいただいて、天国に凱旋することができるのです。ですから迫害による殉教さえも恐れることはありません。クリスチャンは第二の死に対して勝利しているからです。

2：12－17 偶像礼拝を行っていたペルガモ教会

1. ペルガモ教会への手紙 2：12

ペルガモはスミルナの北80キロに位置する政治と文化の中心地でした。ここにはアレキサンドリアに次ぐ20万巻の蔵書を持つ図書館がありました。またペルガモには、病気を治すことで有名なアスクレピオス神殿がありました。多くの人が病のいやしを求めて、この神殿に参拝しました。アスクレピオスは医学の守護神であり、アスクレピオスが持つ蛇の巻き付いた杖は、今日もWHOをはじめ各国の医療機関でシンボルとして使われています。またペルガモには皇帝礼拝を行うトラヤヌス神殿があり、皇帝礼拝の中心地でもありました。イエスは「鋭い、両刃の剣を持つ方」として、真理のみことばを持つ権威をもって、ペルガモ教会に語られました。

2. 忠実な信仰者たち 2：13

イエスはペルガモには「サタンの王座がある」と言われます。それは一つにはアスクレピオス神殿を指しています。神殿の象徴である蛇は、聖書ではサタンを象徴するものでした。もう一つは皇帝礼拝を指しています。「カイザルは主」と告白する皇帝礼拝は、「イエスは主」と告白するキリスト教信仰と相反する偶像礼拝でした。このような町で、クリスチャンに対する迫害は厳しいものでした。実際、イエスの忠実な証人アンテパスは、イエスの名を堅く保ち、「イエスは主」と告白し続けた結果、殉教しました。しかし、そのような殉教者が出た時も、ペルガモのクリスチャンたちはイエスに対する信仰を捨てることなく、主に忠実に歩んだのです。サタンは「この世の神」(Ⅱコリント4：4)と呼ばれており、どこにでも存在し、キリスト教迫害の背後にはサタンの働きがあります。そのような中で、私達も忠実な主イエスの証人として歩んでいきましょう。

3. 偶像礼拝と不品行の罪 2：14－16

イエスは、ペルガモ教会に非難すべきことを伝えました。それはバラムの教えを奉じている人々がいることです。旧約の占い師バラムは、モアブの王バラクに雇われてイスラエルの民を呪うように命じられますが、逆にイスラエルを祝福しました。けれども、彼はミデヤン人の娘をそそのかして、イスラエル人に偶像礼拝を行わせました。新約時代のバラムの教えとは偶像礼拝と不品行を教える教えのことで、ニコライ派とも呼ばれていました。ペルガモでは、あるクリスチャンたちは妥協して皇帝礼拝を行っていたのです。皇帝礼拝はキリスト教信仰と矛盾しないという彼らの主張は間違っていました。ですから、イエスは彼らに対して悔い改めを命じておられます。もし悔い改めなければ、イエスは福音の真理を守るために、彼らを教会の交わりから引き離してしまわれます。

4. 隠れたマナと白い石 2：17

イエスは、信仰の耳をもって御霊のことばを聞くようにと命じられます。そして、信仰の勝利を得る者には、隠れたマナと白い石を与えると約束されました。隠れたマナとはいのちのパンであるイエス・キリストのことです。イエスの救いは私達に永遠のいのちを与え、私達を天の御国へと導いてくださいます。また、白い石とは当時法廷において陪審員が壺の中に白い石を投げ入れると無罪を表したことから、キリストの義が与えられることを意味しています。また宴会の客にチケットとして白い石を渡し、白い石を持っている人は自由に宴会に入ることができたことから、天国に入る確かな約束を意味します。石に書かれている新しい名は、キリストにある新しい人を意味します。

2 : 18 - 29 この世と妥協したテアテラ教会

1. テアテラ教会への手紙 2 : 18

テアテラはペルガモの南東 60 キロに位置する町で、ペルガモとサルデスを結ぶ道路の中間に位置しており、現在ではアクヒサルという名前に代わっています。テアテラはセレウコス朝(BC312~63)を築いたセレウコス 1 世により建設され、交通が便利のため商工業が発達しました。毛織物、亜麻布、革製品、染物などが盛んで、特に、あかね草で染めた紫布で有名でした。パウロのピリピ伝道の初穂となったルデアは、テアテラ出身の紫布の商人でした。(使徒 16 : 14, 15) また、アジア州で最も古くから同業組合が存在し、聖書時代も多く同業組合がありました。テアテラ教会に語られるイエスは、「燃える炎のような目を持ち」罪に対する怒りを表されます。また「その足は光り輝くしんちゅうのような、神の子」であり、すべてのものをその足の下に踏みつける権威を持っておられます。

2. 愛と信仰と奉仕と忍耐 2 : 19

イエスはまず、テアテラ教会の賞賛すべき点を挙げられます。それは彼らの行い、即ちテアテラ教会の「愛と信仰と奉仕と忍耐」です。しかも「あなたの近ごろの行いが初めの行いにまさっている」と言ってほめておられます。愛と信仰はクリスチャンの奉仕の土台です。ひとり子イエスをお与えになった神の愛を知り、イエスを主と信じる時に、私達の心に神に対する愛が与えられ、また隣人に対する愛に押し出され、奉仕の働きに遣わされます。そして奉仕を継続させる力が忍耐です。奉仕は楽しいことだけでなく、様々な困難にも直面します。その時、神に対する信仰と神からの愛をいただいて忍耐を働かせる時、奉仕のわざを続けることができるのです。テアテラ教会はこの点で成長していたのです。

3. 偽預言者イゼベルの教え 2 : 20 - 23

けれども、次にイエスはテアテラ教会に対して非難すべき点を挙げ、悔い改めを命じられました。それはイゼベルと呼ばれる偽預言者の教えに従う人達が教会内にいたことです。イゼベルはアハブ王の妻で、北イスラエルに偶像礼拝と不品行をもたらした人です。この偽預言者の教えはニコライ派の教えと同じで、「不品行を行わせ、偶像の神にささげたものを食べさせて」いました。テアテラでは、同業組合の会合を偶像の神殿で行い、そこで偶像にささげた物を食べ、不品行が行われていました。クリスチャンの商人たちもこのような同業組合の会合に参加して罪を犯していたのです。そしてイゼベルの教えでは、これは許されるものでした。しかし、イエスはこの罪を非難し、イゼベルをさばくことを伝え、またイゼベルの教えから離れず、罪を悔い改めない者もさばくと警告を与えられました。私達もこの世と妥協し、罪に陥らないように注意しなければなりません。

4. 勝利を得る者 2 : 24 - 29

最後にイエスは、イゼベルの教えに陥らず、忠実に信仰を保つ者に対する励ましと約束を与えられます。イエスは彼らに「ほかの重荷を負わせない。」と言われました。即ち、信仰を保つために、他の律法の行いを求めることは無いということです。ただすでに持っているキリストの福音をしっかりと持つことが大切なのです。その人は終末の時に勝利を得る者となり、詩篇 2 : 8 にある諸国の民を支配する権威と、詩篇 2 : 9 にある諸国の民を鉄の杖をもって土の器を打ち砕くようにして治める権威が与えられます。これらはキリストに与えられる権威であり、勝利を得る者にもキリストと共に治める権威が与えられるのです。また勝利を得る者には「明けの明星」であるキリストご自身が与えられます。

3 : 1 - 6 死んでいるサルデス教会

1. サルデス教会への手紙 3 : 1

サルデスはスミルナから東に70キロに位置し、現在はサルトという村にある遺跡で、ローマ時代の遺跡が小アジアにおいて一番良く保存されています。内陸からエーゲ海に通じる重要な道路が通り、ヘルムス川流域の肥沃な平野を支配できることから、サルデスは昔から小アジアの主要都市として栄えました。町は切り立った岩壁に囲まれているので、難攻不落を誇り安心して切っていました。歴史上2度にわたり敵の攻撃を受け、陥落しました。また紀元後17年には地震によって町は破壊されましたが、その後再建されて繁栄しました。サルデスでは、クリスチャンに対する激しい迫害はありませんでしたが、問題は内部にあり、霊的に無気力で全く沈滞していました。イエスはそのようなサルデス教会の状態を知って、「あなたは、生きてるとされているが、実は死んでいる。」と言って、警告を与えられました。

2. 目を覚ませ 3 : 2

サルデス教会はキリストの救いにあずかっていながら、霊的に居眠りをし、霊的に死んでいるのと同じ状態になっていました。そこでイエスは、「目をさましなさい。」と警告を与えられます。歴史上油断していた結果、町が陥落する経験をしているサルデスの人々にとって、「目を覚ませ」という警告は深い意味を持っていました。彼らには「死にかけているほかの人たちを力づける」という使命が与えられていたのに、その使命を果たさず、自己満足に陥っていたのです。そこでイエスは、「わたしは、あなたの行いが、わたしの神の御前に全うされたとは見ていない。」と言われます。彼らは神からの使命を十分果たさず、中途半端で満足し妥協する信仰生活を送っていたのです。クリスチャンだけが「死にかけているほかの人たちを力づけなさい。」というイエスの命令を果たすことができるのです。

3. 思い出し、堅く守り、悔い改めよ 3 : 3

霊的に目を覚ますとは、信仰の原点に立ち返ることです。具体的にはまず彼らが受け、聞いた福音を「思い出し、それを堅く守る」ことです。クリスチャンはキリストの福音を受け入れ信じた時に、霊的に目覚め生きる者となりました。その原点に戻るためには私達が信じた福音を思い出し、それを堅く守らなければならないのです。そのためには「悔い改め」なければなりません。悔い改めとは方向転換を意味します。神からいつの間にか離れ、自己満足に生きていた信仰生活から方向転換して、再び神のみこころに従っていくことです。イエスはサルデス教会に対して、「もし、目を覚まさなければわたしは盗人のように来る。あなたには、わたしがいつあなたのところに来るか、決してわからない。」と警告を与えられます。霊的に眠りこけ油断をしている時に、突如イエスが再臨されて驚くことがないように、目を覚ましていなければならないのです。

4. 勝利を得る者 3 : 4 - 6

「しかし、サルデスにはその衣を汚さなかった者が幾人かいる。」とイエスは言われました。目を覚まし、使命を果たしていた忠実な信者がサルデスにもいたのです。彼らは勝利を得る者であり、白い衣を着てイエスと共に天の御国で歩むことができるのです。白い衣とは、天における勝利と栄光と神の民の身分を表す衣です。彼らの名前はいのちの書から消されることは決してなく、むしろ父なる神と御使いの前で言い表されるという光栄にあずかることができるのです。私達も霊的に気力を失い、居眠りをしていると感じた時には、すぐ悔い改め、福音の原点に立ち返って、神から与えられた使命を全うする者となりましょう。

3：7－13 忠実なフィラデルフィア教会

1. フィラデルフィア教会への手紙 3：7

「兄弟愛」を意味するフィラデルフィアは、サルデスの南東 45 キロにあり、サルデスから奥地に至る幹線道路が通じていました。町は 1391 年にオスマントルコによりイスラム化され、現在は「アラーの町」を意味するアラシェフィルという町になっています。聖なる神、みことばを成就する真実なイエスは、イザヤ 22：22 の預言の成就者として、フィラデルフィア教会に語られます。イエスが開いたり閉じたりする「門」とは天の御国の門です。またイエスが持つ「ダビデの鍵」とは、天の御国の門の開閉できる権威です。イエスだけが私達を天の御国に入れることも、拒むこともできる絶対的権威を持っておられるのです。

2. 忠実な信仰者 3：8, 9

フィラデルフィア教会は、スミルナ教会と同様に「サタンの会衆に属する者」と呼ばれるユダヤ人に苦しめられていました。ユダヤ人たちはキリスト者に敵対し、教会を迫害しました。実際、155 年にユダヤ人の訴えにより、スミルナ教会の主教ポリュカルポスが殉教した時に、フィラデルフィア教会の信徒 11 人も共に殉教しました。けれども、フィラデルフィア教会の信徒達は、困難な中にも信仰を守り通しました。イエスは彼らに対して、「あなたには少しばかりの力があって、わたしのことばを守り、わたしの名を否まなかった」と賞賛を与えられました。イエスのことばを守り、イエスの名を告白し、あかしすることによって、彼らは信仰を守り、福音がさらに広がっていったのです。イエスは彼らに御国の門を開いておく約束され、教会を迫害するユダヤ人がやがて、神が教会に勝利を与えられたことを認める時が来ると言われました。

3. 教会を試練から守るイエス 3：10, 11

フィラデルフィア教会は、イエスの忍耐についてのことばを守り、信仰を忠実に守りました。そこでイエスも、世界的な患難時代の試練の時には彼らを守ると約束されました。「地上に住む者達を試みるために、全世界に來ようとしている試練の時」とは、終末の大患難時代と考えられます。その激しい試練に対しては、イエスに守っていただかなければだれも耐えることはできません。その試練の最後にはイエスが再臨されます。「わたしはすぐに来る。」イエスの再臨の時は誰にもわかりません。けれども、すぐにもイエスが来られてもいいように、気を引き締めて、主から与えられた「いのちの冠」である救いをしっかりと持ち続けなければなりません。

4. 天の御国の祝福 3：12, 13

イエスは「勝利を得る者を、わたしの聖所の柱としよう。」と言われます。柱が建物にしっかりと組み込まれているように、彼らは永遠に神の臨在のもとに置かれる祝福にあずかるのです。そこで「彼らはもはや決して(天の御国の)外に出て行くことはない」のです。またイエスは勝利を得る者に三つの名を与えると約束されます。一つは「わたしの神の御名」です。これは神に属する者であることを示します。二つ目は「神の都の名」です。これは新しい神の都エルサレムの住民であることを表します。三つ目は「わたしの新しい名」です。これはキリストにより与えられた神の民の身分を表します。たとえ地上での信仰生活が試練の中にあっても忍耐し、忠実に主に信頼して歩む者には、主は天で大いなる祝福を与えてくださるのです。

3 : 14 - 22 なまぬるいラオデキア教会

1. ラオデキア教会への手紙 3 : 14

ラオデキアはエペソの東 150 キロ、コロサイの北西 16 キロ、ヒエラポリスの南西 10 キロに位置し、世界の商業中心地として栄えました。特に金融業、黒羊の羊毛の毛織物、目薬で有名で、町は豊かさを誇っていました。現在はデニズリの町に遺跡が残り、今も発掘作業中ですが、遺跡から当時の豊かな町の姿を垣間見ることができます。ラオデキアには水源がなかったため、10 キロの用水路を通して水が町に流れてきました。そのため水源の水は冷たくても、用水路を通る間に水はなまぬるくなって町に入ってきました。イエスはアーメン(真理、まこと)の神として、忠実で真実な証人として、また神に造られたものの根源、即ち創造者としてラオデキアの教会に語られました。

2. なまぬるい信仰 3 : 15 - 17

ラオデキアは経済的に繁栄し、迫害もなく、偶像礼拝や不品行の罪もありませんでした。平和と繁栄のゆえに自己満足に陥り、なまぬるい信仰になってしまいました。イエスは、熱くも冷たくもなく、どっちつかずのなまぬるい信仰を我慢することができず、「わたしの口からあなたを吐き出そう。」と言われます。ラオデキア教会は町の繁栄を受けて、物質的な豊かさを享受し、「自分は富んでいる、豊かになった、乏しいものは何もない」と言っていました。しかし、彼らは霊的には逆に貧しくなり、「実は自分がみじめで、衰れで、貧しくて、盲目で、裸の者であることを知らない」状態に陥っていたのです。ラオデキア教会は、物質的には貧しくても霊的には富んでいたスミルナ教会と対照的な教会でした。

3. 熱心な悔い改め 3 : 18, 19

ラオデキア教会への手紙は、7 つの教会への手紙の中でも最も厳しいイエスの忠告が語られています。しかし、それはイエスがラオデキア教会を愛するからであり、「愛する者をしかったり、懲らしめたりする」のです。悔い改めとは方向転換を意味します。単に自分の罪を認め、神に謝るだけでなく、罪から離れて神に喜ばれる道を歩むことです。そこでイエスは3つのものをご自分から買うようにと言われます。「買う」とは信仰によってイエスに求めよということです。一つは「豊かな者となるために、火で精錬された金」です。これは真の霊的富です。二つ目は「裸の恥を現さないために着る白い衣」です。これはキリストの義です。三つ目は「目が見えるようになるため、目に塗る目薬」です。これは聖霊の解き明かしです。このようにイエスはラオデキア教会に熱心な悔い改めを求められました。

4. キリストの招き 3 : 20 - 22

イエスは私達に悔い改めを求められるだけでなく、悔い改めることができるように私達の所に来てくださり、私達の心の扉をたたいてくださるのです。そして、だれでもイエスの声を聞いて、心の戸を開き、イエスを内に迎え入れるなら、イエスは私達の救い主として心に入って来てくださり、神との交わりが回復するのです。その時、私達の心は熱く燃え上がり、神に対して熱心になることができます。イエスと食事を共にするとは、イエスと私達が深い交わりの中に入れられるということです。その人は、やがて勝利を得る者となり、天の御国でイエスの御座に招かれ、天の祝宴にあずかることができます。私達も自分の信仰のなまぬるさに気づいたならば、熱心に悔い改め、イエスを心にお迎えし、イエスとの交わりの中で、信仰を燃え立たせていただきましょう。

4 : 1 - 11 父なる神の幻

1. 天に上げられるヨハネ 4 : 1

7つの教会への手紙の啓示を受けた後、ヨハネは天における幻を見ました。ヨハネは「天にある一つの開いた門」を見ました。そして、「ここに上れ。この後、必ず起こる事をあなたに示そう。」とラッパのような声で語られるイエス・キリストの呼びかけを聞きました。ヨハネはこれまで地上にいましたが、いよいよこれから天に上げられ、「この後、必ず起こる事」の啓示を受けます。これまでは地上における迫害に悩み、罪に汚れ、なまぬるくなり、賞賛される面もあれば欠点もある地上の教会の状況が述べられました。それに対して、4章、5章では天において父なる神とキリストの栄光を拝する栄光の教会の姿が記されます。地上の教会はやがて栄化され、天の栄光の教会と変えられるのです。

2. 父なる神の御座 4 : 2 - 5

御霊に感じたヨハネは、天の御座とそこに着いておられる方を見ました。これは父なる神とその御座です。碧玉や赤めのうは神の栄光と尊厳を表し、緑玉のように見える虹は神の契約のしるしを表します。その御座の周りに24の座があり、これらの座に24人の長老たちが座っていました。24人の長老たちは全聖徒の代表です。彼らはキリストの義を表す白い衣を着て、救いの栄光を表す金の冠を頭にかぶっていました。御座には神の七つの御霊である聖霊がおられ、消えることのない七つのともしびである光として御座の前で輝いています。御座から起こるいかなるまじき雷鳴は神の力と栄光を表しています。

3. 四つの生き物の礼拝 4 : 6 - 8

御座の前にある水晶に似たガラスの海も神の栄光の輝きを表しています。その中央と回りに「前もうしろも目で満ちた四つの生き物」がいました。四つの生き物はしし、雄牛、人間のような顔、わしのようにあり、それぞれが六つの翼を持ち、その回りも内側も目で満ちていました。これらの四つの生き物は全被造物の代表です。彼らは昼も夜も絶え間なく叫び続けて主を賛美していました。「聖なるかな。聖なるかな。聖なるかな。」はイザヤ6 : 3のセラフィムの賛美に似ており、神の近づきがたいよさを強調しています。神は万物の主であり、永遠に存在されるお方です。

4. 24人の長老の礼拝 4 : 9 - 11

全被造物の代表である四つの生き物が賛美をささげていると、全聖徒の代表である24人の長老も御前にひれ伏し、神を拝み賛美しました。「自分の冠を御座の前に投げ出して」とは自分の栄光を捨て、自らを低くして、神にのみ栄光を帰することを表しています。私達が神を礼拝し、賛美するのは、神だけが「栄光と誉れと力を受けるにふさわしい方」だからです。すべてのものは偶然に存在しているのではなく、神のみこころのゆえに創造され、存在しています。それゆえ、創造者なる神を離れては、私達は自分の存在意義も人生の目的も見出すことができません。「あなたのみこころのゆえに、万物は存在し、また創造されたのですから。」と、私達も地上にあって主をほめたたえつつ、みこころに従って生きていきましょう。

5 : 1 - 14 小羊の幻

1. 七つの封印の巻き物 5 : 1 - 4

5 章ではヨハネは天におられる小羊イエスと小羊への礼拝を見ます。その前にまずヨハネは父なる神が七つの封印で封じられた巻き物を持っておられるのを見ました。この巻き物には神の未来に対する計画が記されており、七つの封印で封じられていたので、人間には知ることができない絶対的の秘密でした。ですから、御使いが「巻き物を開いて、封印を解くのにふさわしい者はだれか。」と言っても、だれひとり封印を解くことができる者はいなかったのです。将来についての神のご計画を知ることができる者は、この世には誰もいません。ですから、神だけが知っておられる将来を知ろうとして、人間が占いや予言をすることは、神に対する罪となるのです。ヨハネは巻き物をだれも開くことができないのを知って、激しく泣きました。

2. 巻き物を受け取る小羊 5 : 5 - 7

すると長老の一人がヨハネに、封印を解くことができるお方を示しました。それはユダ族から出たしし(創世 49:9 ユダは獅子の子)、ダビデの根(イザヤ 11:10 エッサイの根)である小羊イエス・キリストです。ヨハネは御座と長老たちの間に、ほふられたとみられる小羊が立っているのを見ました。小羊には救いの力を表す七つの角と聖霊を表す七つの目がありました。小羊はほふられて、その血により人々を贖われ、勝利を得られたので、七つの封印を解くことができるのです。小羊は父なる神の右の手から、巻き物を受け取られました。

3. 新しい歌 5 : 8 - 10

小羊が巻き物を受け取った時、全被造物の代表である四つの生き物と全聖徒の代表である 24 人の長老は、賛美に用いる堅琴と祈りを表す香の入った金の鉢を持って、小羊の前にひれ伏しました。そして、巻き物を開くにふさわしい小羊をほめたたえる新しい歌を歌いました。小羊イエスはほふられて、十字架で流された血により、全世界からご自分の民を贖い出してくださる贖い主です。「神のために」とは贖われた者は神の所有の民となるということです。そしてキリストは、贖われた民を神の王国の一員とし、祭司としてくださいました。「彼らは地上を治めるのです。」とは、最後の審判の前に来る千年王国における支配のことと考えられます。

4. 小羊への賛美 5 : 11 - 14

四つの生き物と 24 人の長老の賛美の後に、多くの御使いたちが賛美に加わりました。その数は数え切れないほど大勢で、彼らは大声で賛美したのです。彼らは七つのことばをもって小羊を賛美しました。「ほふられた小羊は、力と、富と、知恵と、勢いと、誉れと、栄光と、賛美を受けるにふさわしい方です。」すると次に、全被造物が四つのことばをもって、父なる神と小羊に賛美をささげました。そして、四つの生き物はアーメンと言ひ、長老たちはひれ伏して拝みました。ヘンデルのメサイアの最後の合唱は、黙示録 5:9, 12, 13, 14 のみことばを歌っています。「われらをば血をもて買いたまいし小羊に帰しまつれ 栄え 誉れ 富 力 知識 名誉 聖き血潮もて贖いたまいし小羊に帰しまつれ 賛美と名誉と力と富と知識 御座に座したもう小羊にあれ！とわにあれ！アーメン。」私達も天の礼拝の光景を思いながら、地上において礼拝をささげましょう。

6 : 1－8 七つの封印の幻

1. 第1の封印 6 : 1, 2

小羊イエスにより七つの封印が1つずつ解かれていくと、この後起こる事が幻によって示されます。まず小羊が第1の封印を解くと、四つの生き物の一つが雷のような声で「来なさい。」と言いました。ヨハネはその声に従って前に出ると、勝利を象徴する白い馬を見ました。それに乗っている者は武力を象徴する弓を持ち、勝利を象徴する冠を与えられていました。そして、勝利の上にさらに勝利を得ようとして出ていきました。19:11 では白い馬に乗るキリストが出てきますが、ここでの白い馬に乗る者はキリストではなく、この世の支配者です。彼は世界を武力で征服し、一時的ではあってもこの世の平和が保たれるのです。そして、その平和が患難時代の幕開けとなるのです。

2. 第2の封印 6 : 3, 4

小羊が第2の封印を解くと、第2の生き物が「来なさい。」とヨハネを呼びました。すると今度は流血を象徴する火のように赤い馬が出て来ました。この馬に乗っている者は、地上から平和を奪い去ることが許されていきました。終末になると人々は互いに殺し合うようになり、この世の支配者がもたらした一時的な平和は終わりを告げます。イエスはマタイ24章で世の終わりの前兆として、戦争のことや戦争のうわさを聞き、民族同士、国同士が敵対すると教えられましたが、まさにそのようになるのです。赤い馬に乗っている者が持つ「大きな剣」は神のさばきを表します。人々が殺し合う罪に対して、神はさばきを行われるのです。

3. 第3の封印 6 : 5, 6

小羊が第3の封印を解いたとき、第3の生き物が「来なさい。」とヨハネを呼びました。するとヨハネはききんの象徴である黒い馬を見ました。これに乗っている者は量りを持っていました。すると一つの声のようなものが四つの生き物の間で上がりました。それは神か小羊の声と考えられます。小麦一升は約1リットルで一人一日分の食料です。1デナリは一日の賃金ですから、一日働いても一人分の小麦しか買えないほど、ききんのために物価が上がるのです。大麦であれば1デナリで三人分の食料が買え、家族が何とか食べていけるという状況です。「オリーブ油とぶどう酒には害を与えてはいけない。」と言われますが、これらのぜいたく品はききんの中でも豊かにあることにより、貧富の差が激しくなることが暗示されています。

4. 第4の封印 6 : 7, 8

小羊が第4の封印を解いたとき、第4の生き物が「来なさい。」とヨハネを呼びました。すると今度は死を象徴する青ざめた馬をヨハネは見ました。これに乗っている者の名は死と言い、そのあとにはハデス（よみ）がつき従っていました。彼らには地上の四分の一を剣とききんと死病と地上の獣によって殺す権威が与えられていました。この青ざめた馬が現れる時、今まで経験したことのない地上の四分の一の人が死ぬという苦難を経験するのです。しかも、それで終わりが来たものではありません。なお患難時代は続いていきます。ここに患難の中での聖徒の忍耐が必要とされるのです。

6 : 9 - 17 七つの封印の幻 II

1. 第5の封印 6 : 9 - 11

小羊が第5の封印を解いたとき、ヨハネは殉教者のたましいが天の祭壇の下にいるのを見ました。殉教者は神のことばと自分たちが立てた証しとのために殺された人々です。彼らは迫害者に対するさばきと血の復讐を主に求めて、大声で叫びました。すると彼らの一人一人に白い衣が与えられました。白い衣はキリストの義の衣であり、また勝利の衣です。彼らは迫害者に負けたように見えても、実際は神から勝利をいただいたのです。そして主は、「殉教者の数が満ちるまで、もうしばらくの間休んでいなさい。」と言われました。患難時代にはなお殉教者が増えることが明らかにされるとともに、主は天の殉教者に対して、さばきは主にゆだねて平安のうちにその時を待つようにと言われたのです。

2. 第6の封印 6 : 12 - 14

小羊が第6の封印を解いたとき、ヨハネは天変地異が起こるのを見ました。まず大きな地震が起こり、次に太陽は毛の荒布のように黒くなり、月の全面が血のようになりました。(ヨエル 2:31) そして天の星が地上に落ちました。また天は巻き物が巻かれるように消えてなくなり、天体の秩序が変わり、さらに地殻の変動が起こりました。イエスもマタイ 24章で、終末の時に地震が起き、太陽は暗くなり、月は光を放たず、星は天から落ち、天の万象は揺り動かされると教えられました。このような天変地異は歴史上起こったことのないものでした。

3. 神と小羊の怒り 6 : 15、16

このような天地の変動を経験して、人々は神の怒りが自分たちに対して向けられていると気づき、恐れをいだき、ろうばいしました。7種類の人々は神を信じないすべての人を表しています。彼らはほら穴と山の岩間に隠れ、神の怒りから逃れるために、山や岩に向かって、「自分たちに倒れかかって、かくまってくれ。」と言いました。この神の怒りは「御座にある方の御顔」即ち父なる神と「小羊」イエスから来ていました。イエスは罪人の罪を贖うために死なれた救い主であるだけでなく、罪を悔い改めない者をさばかれるさばき主でもあるのです。

4. 神の前に立つ人 6 : 17

人々はこの天変地異によって表わされた神の怒りを「御怒りの大いなる日」即ち最後の審判の時が来たのだと思いました。しかし、実際はまだ第7の封印が残されており、終末の前兆の一部でしかありません。人々は「だれが最後の審判に耐えられよう。」と言いました。「耐える」は「立つ」とも訳される言葉です。キリストの救いにあずからない者はだれも神の前に立つことができません。これは7:9の御座と小羊との前に立っていた聖徒たちと対照的です。ヨエル 2:31、32には「主の大いなる恐るべき日が来る前に、太陽はやみとなり、月は血に変わる。しかし、主の御名を呼ぶ者はみな救われる。」とあります。主の御名を呼び、主によって救われた者は、さばきの日にも大胆に神の前に立つことができるのです。

7 : 1－8 14万4千人の幻

1. 4人の御使い 7 : 1

7章は第6の封印が解かれて後、第7の封印が解かれるまでの挿入部分です。1－8節には地上で額に印を押された14万4千人の幻、9－17節には天で神の祝福に満たされた大群衆の幻が示されます。ヨハネは第6の封印が解かれた後、4人の御使いを見ました。彼らは「地の四隅に立って、地の四方の風を堅く押え」ていました。4人の御使いは2節を見ると、「地をも海をもそこなう権威」を与えられていました。しかしこの時、彼らは風が「地にも海にもどんな木にも、吹きつけないようにしていた」のです。

2. 額に印を押す御使い 7 : 2, 3

ヨハネは次に、「もう一人の御使いが、生ける神の印を持って、日の出る方から上って来た」のを見ました。彼は4人の御使いに大声で、「私たちが神のしもべたちの額に印を押してしまうまで、地にも海にも木にも害を与えてはいけない。」と叫びました。神に忠実な者の額には神の印が押されます。印を押された者の額には神と子羊の名が記されます。(14 : 1, 22 : 4) 神の印が押されることによって、彼らは神の所有の民であることが示されました。パウロはエペソ 4 : 30 で「あなたがたは、贖いの日のために、聖霊によって証印を押されているのです。」と言っています。御使いは、神の民に印を押し終えるまでは次の災いが来ないことを保証し、神の民に対する神の恵みを表しました。

3. 14万4千人 7 : 4

ヨハネが、額に印を押された人々の数を聞くと、その数は14万4千人でした。それはイスラエルの子孫のあらゆる部族の者が印を押されていました。「14万4千人」とは、12部族を表す12の2乗に、完全数を表す10の3乗を掛けた数です。これは救われた神の民の人数を象徴的に表しています。神の民は非常に多いが、一定の限度を持っている数であるということです。14 : 1でも小羊とともにいる神の民の数が14万4千人であり、彼らの額には神と小羊の名のしるしがあります。ここでも14万4千人は神の民の人数を象徴的に表していることがわかります。また「イスラエル」もイスラエル民族のことではなく、霊的イスラエルのことであり、救われた神の民を表しています。救いの民はすべての国民から集められ、彼らのすべてに神の印が押されるのです。

4. すべての救われた民 7 : 5－8

5節から8節には14万4千人の内訳が記されています。12部族それぞれに1万2千人の神の印を押された者がいました。ユダ族が最初に挙げられているのは、ユダ族から救い主イエスが現れたからだと考えられます。またダン部族が除外され、代わりにレビ部族が加えられています。これはダン部族がしばしば偶像礼拝を行ったためであると考えられます。(レビ 24 : 11、士師 18 章) これらの12部族は、真の霊的イスラエルである全聖徒を表しています。彼らはみな額に神の印が押されていました。

7 : 9 - 17 天における大群衆の幻

1. 天における大群衆 7 : 9

8節までの14万4千人の幻は地上の光景でしたが、9節からは天上の幻です。ヨハネは「あらゆる国民、部族、民族、国語のうちから、だれにも数えきれぬほどの大勢の群衆が、御座と小羊との前に立って」いるのを見ました。7章前半の地上における14万4千人と後半の天における大群衆とは、同じ人々のことです。神の印を押される地上の14万4千人は、災害を前にして、神の守りが保障される地上における戦う教会の姿です。一方、天の大群衆は、災害が終わり、神の御前に引き上げられた天における勝利の教会の姿です。彼らは勝利とキリストの義を表す白い衣を着、勝利を喜ぶときに用いるしゅろの枝を手にもって、御座と小羊の前に立っていました。

2. 神と小羊への賛美 7 : 10 - 12

あらゆる国民、国語から救われた天の大群衆は、大声で叫んで、「救いは、御座にある私たちの神にあり、小羊にある。」と賛美しました。救いは人間の行いによってもたらされたのではなく、神のものであり、小羊イエスの尊いいのちの犠牲によって、私たちに与えられたのです。すると今度は、御使いが御座の前にひれ伏し、神を拝して賛美しました。御使いの賛美の最初の「アーメン」は、大群衆の賛美への同意を表します。また七つの言葉による賛美は、「富」が「感謝」に変わっている以外は、5:12の御使いの賛美と同じです。5:12では小羊への賛美ですが、ここでは父なる神への賛美です。父なる神も小羊も同じ賛美がささげられるにふさわしいお方なのです。

3. 白い衣を着ている人たち 7 : 13, 14

長老の一人がヨハネに、「白い衣を着ているこの人たちは、いったいだれですか。どこから来たのですか。」問いかけると、ヨハネは「主よ。あなたこそご存知です。」と答えました。すると、長老は彼らがどのような人であるかを教えてくれました。彼らはまず「大きな患難から抜け出てきた者たち」です。彼らは終末の患難を通り越した人たちであり、またあらゆる時代の患難から抜け出てきた者たちです。また彼らは「その衣を小羊の血で洗って、白くした」人達です。彼らはキリストの十字架による贖いの血が自分のために流されたことを信じ、自らの意志で悔い改め、キリストを信じた人たちです。彼らの信仰によって、キリストの義をいただくことができたのです。

4. 牧者である小羊 7 : 15 - 17

彼らは小羊の血によってキリストの義をいただいたので、神の御座の前にいて、天の聖所で昼も夜も神に仕えています。神が「彼らの上に幕屋を張る」とは神が彼らと共におられるということです。(21:3)天においては昼も夜も永遠に神を礼拝し、神に仕えるのです。また、天においては地上のような災いは一切ありません。なぜなら、御座の正面におられる小羊が、彼らの牧者となり、いのちの水の泉に導いてくださるからです。犠牲のいけにえとなられた小羊イエスは、神の羊である私達の牧者となり、私達の必要を一切満たしてください。また神は彼らの目の涙をすっかりぬぐい取ってくださり、私たちは永遠に神の祝福にあずかります。(21:4)

8 : 1－7 第7の封印

1. 第7の封印 8 : 1, 2

ついに小羊が巻き物の最後の封印である第7の封印を解きました。すると天に半時間ばかりの静けさがありました。この静けさは患難の嵐の前の静けさです。神はご自身が定められたさばきの時を待っておられます。私達は静けさの前に神のさばきは終わったなどと考えて高慢になってはいけません。かえって、神の前にへりくだり、患難に備えなければならないのです。半時間の静けさが終わると、神の御前に立つ7人の御使いたちに7つのラッパが与えられました。このラッパが1つずつ吹き鳴らされるごとに、神のさばきとしての災害が起こります。ラッパの音は、地上では災害を知らせるしるしですが、天では神の勝利を知らせるしるしです。神の正義がさばきによって表わされるからです。

2. 聖徒たちの祈り 8 : 3, 4

次にもう一人の御使いが金の香炉を持って祭壇のところに立ちました。彼にはたくさんの香が与えられ、香の煙は聖徒たちの祈りと共に神の御前に立ち上りました。香は祈りの象徴であり、患難時代の中でも聖徒たちは熱心に祈るのです。神は患難時代においても聖徒たちの祈りを喜んで聞かれます。確かに患難時代は神のさばきの現れです。しかし、その中でも、神は一人でも多くの人が救われることを願われるのです。そして、そのために聖徒たちはとりなしの祈りをするのです。また聖徒たちは患難時代の中で、神の守りを祈ります。神こそ聖徒たちの避け所だからです

3. 地に投げつけられた香炉 8 : 5, 6

その後、御使いは香炉を取り、祭壇の火でそれを満たしてから、地に投げつけました。これは神のさばきの火です。火が地に投げつけられると、雷鳴と声といわずと地震が起こりました。これらは神のさばきの前兆であり、神の全能の力が自然界のどよめきの中に表わされたのです。すると、7つのラッパを持っていた7人の御使いがラッパを吹く用意をしました。オーケストラの団員がラッパを口に当てて、指揮者の合図を待っているように、御使いは、神の合図が下され、順番が来ればいつでもラッパを吹き鳴らす用意をしたのです。

4. 第1のラッパ 8 : 7

ついに第1の御使いがラッパを吹き鳴らしました。すると、血の混じった雹と火とが現れ、地上に投げられました。雹と火は、エジプトに対する十の災害の中でも下されました。(出エジプト9:24)ヨエル2:30では、終わりの時には「血と火と煙の柱の不思議なしるしが天と地に現れる」と預言されています。血の混じった雹と火が地に投げられると、地上の三分の一が焼け、木の三分の一も焼け、青草が全部焼けてしまいました。人々は大災害を経験します。けれどもこの災害は地の三分の一にしか及ばず、後の三分の二は免れます。さばきはなおも続くのです。このような災害に会うとき、人々は二つの反応を示します。一つは神に対して心をかたくなにし、ますます不信仰になることです。もう一つは神に心を開き、悔い改めてキリストを信じることです。患難の中にも救いの門は開かれています。信じない者にならないで、信じる者になりましょう。

8：8－13 第2から第4のラッパ

1. 第2のラッパ 8：8、9

第1のラッパは地上に災害をもたらしたのに対して、第2のラッパは海に災害をもたらします。第2の御使いがラッパを吹き鳴らすと、火の燃えている大きな山のようなものが、海に投げ込まれました。この巨大な火のかたまりが海に投げ込まれると、海の三分の一が血となりました。これはエジプトに対するナイル川が血に変わる災いに似ています。（出エジプト7：20，21）すると海の生き物の三分の一が死にました。それは海の魚という食料源の三分の一が失われることを意味します。また船の三分の一も打ち壊されました。これによって海上物流の三分の一が失われ、世界は混乱していきます。

2. 第3のラッパ 8：10、11

第3のラッパは川に災害をもたらします。第3の御使いがラッパを吹き鳴らすと、たいまつのように燃えている大きな星が、天から川々の三分の一とその水源に落ちました。この星の名は苦よもぎと呼ばれ、川の三分の一が苦くなり飲めなくなっていました。水が飲めなくなることは、死を意味します。その結果、多くの人が死んでいったのです。ラッパが1つ1つ吹き鳴らされるたびに、神のさばきが進行していきます。人々は大患難時代の真ただ中に置かれるのです。そのような患難の中で主に信頼する者は幸いです。彼らはたとえ死んでも天国に行くことができるからです。また生かされているクリスチャンは患難時代の中で、主の福音をあかしするのです。

3. 第4のラッパ 8：12

第4のラッパは天体の三分の一に災害をもたらします。第4の御使いがラッパを吹き鳴らすと太陽の三分の一と、月の三分の一と、星の三分の一が打たれました。その結果、地上において、三分の一は暗くなり、昼の三分の一は光を失い、夜の三分の一も光を失いました。これはエジプトにおける第9のやみの災いに似ています。（出エジプト10：22）これは昼も夜も今までより三分の一光を失って暗くなることかもしれませんし、昼の時間が三分の一短くなることかもしれません。いずれにしても、やみが地を覆い、人々は不安になり、植物も育たなくなり、人々の健康も損なわれます。けれども、いままでの災害は三分の一にしか及ばず、三分の二は災害を免れます。患難時代はなお続くのです。

4. 一羽のわし 8：13

ラッパの災害の前半の四つが終わると、一羽のわしが中天を飛ぶのをヨハネは見ました。わしは来るべきさばきを象徴する生き物です。わしは大声で来るべきさばきを予告しました。「わざわいが来る。」と三回叫ぶのは、残された三つのラッパと対応しています。「地に住む人々に。あと三人の御使いがラッパを吹き鳴らそうとしている。」わしの警告に、人間は耳を傾け、わざわいに備えなければならないのです。確かに大患難時代の災いは避けられません。しかし、クリスチャンは災いの中でも、神に対する信仰を強め、この世にみこころがなることを祈りつつ、キリストをあかしし、クリスチャン同士が助け合いながら生きていくなれば、患難時代の中にも神の栄光が地上に現されるのです。

9 : 1 - 12 第5のラッパ

1. 第5のラッパ 9 : 1, 2

わしの警告の後、第5の御使いがラッパを吹き鳴らしました。するとヨハネは一つの星が天から地上に落ちるのを見ました。この星には底知れぬ穴を開く鍵が与えられました。この星は通常の星ではなく、悪魔と考えられます。また底知れぬ穴は悪魔や悪霊の住みかと考えられます。悪魔が底知れぬ穴を開くと、穴から大きな炉の煙のような煙が立ち上がりました。その結果、この煙によって空は汚染され、太陽も空も暗くなりました。これは悪魔によって起こる霊的腐敗を予告し、第5のラッパのさばきが悪魔による災いであることを示していると考えられます。

2. いなごの災い 9 : 3 - 6

その煙の中からいなごが地上に出て来ました。このいなごは普通のいなごではなく、悪魔の支配下にある悪魔的軍勢です。彼らには地のさそりの持つような力が与えられ、植物には害を加えないで、額に神の印を押されていない人間にだけ害を加えるように言い渡されました。神に属する者はいなごの害を受けることはありません。神を信じない不信仰の者だけが害を受けるのです。神は、悪魔と悪魔の支配下にある者を用いて、ご自身のさばきを行われるのです。その結果、悪魔に従う者は悪魔によって苦しめられることが起こるのです。いなごに刺されると激痛を覚え、あまりの苦痛のゆえに人々は死を求めますが、死ぬことはできません。このいなごの災いは5カ月間続きます。

3. いなごの特徴 9 : 7 - 10

いなごの形は出陣の用意の整った馬に似ていました。いなごは軍馬が隊列を組んで進撃するように人々に攻撃してくるのです。また頭には金の冠のようなものを着けていました。これは悪魔的な支配力を持っていることを表しています。顔は人間の顔のようであり、人格的知性を持っています。また女の髪のような毛があり、長い触角を持っています。歯は獅子の歯のようであり、鋭く研ぎ澄まされていました。また鉄の胸当てのような堅い胸当てを着けているので、人はいなごを滅ぼすことができません。いなごが飛びかう音は、騎馬戦のような大音響でした。いなごはさそりのような尾と針とを持っており、尾には5カ月間人間に害を加える力がありました。いなごが与える災いの5カ月間は、神を信じない者にとっては恐怖と苦痛の期間ですが、神を信じる者にとっては、神の守りを覚える特別な期間となります。

4. アポリュオン 9 : 11, 12

いなごは底知れぬ所の御使いである悪魔を王としています。いなごの王である悪魔には、ヘブル語で「滅び、破壊」を意味するアバドン、ギリシャ語で「滅ぼす者、破壊者」を意味するアポリュオンという名が付けられています。悪魔は今日「光の御使い」に変装して、人々に近づきますが、本質は破壊者であり、人々を神から引き離し、人間のたましいを滅ぼす者なのです。(Ⅱコリント11:14) 第5のラッパの災いは5カ月間を終えて過ぎ去りました。けれども、なお二つの災いがこれから来ようとしています。この終末の大患難時代に備える時は今です。今、キリストの救いをいただくならば、明日大患難時代が来たとしても、私達は神の特別な守りをいただくことができるのです。

9：13－21 第6のラッパ

1. 第6のラッパ 9：13, 14

第6のラッパが御使いによって吹き鳴らされました。すると、ヨハネは神の御前にある金の祭壇の四隅から出る声を聞きました。金の祭壇は聖徒たちの祈りがささげられるところです。(8：3) 神は聖徒たちの祈りを聞きながら、ご自身のみこころを行うために、災いを地上に下されました。祭壇からの声は第6の御使いに、「大川ユーフラテスのほとりにつながれている4人の御使いを解き放せ。」と命じました。これらの4人の御使いは、悪魔の支配下にある邪悪な御使いであり、この時までつながれていて自由に行動することはできませんでした。しかし、神は終末の患難時代に、災いを下すために4人の邪悪な御使いを解き放されました。

2. 4人の御使いと2億の軍勢 9：15、16

祭壇からの声によって、4人の御使いが人類の三分の一を殺すために解き放されました。彼らはこの災いを下すために、神の定められた時、日、月、年のために用意されていたのです。第4のラッパまでは自然的な災害であり、人は死んだものの、直接人を殺す災いではありませんでした。また、第5のラッパのいなごの災いも人を殺すことは許されませんでした。けれども、第6のラッパでは直接人類の三分の一を殺すことを目的とした災いです。4人の御使いは、2億の騎兵の軍勢を指揮下に置き、彼らを用いて人を殺します。ヨハネは2億という想像を絶する膨大な軍勢の数を聞いたのでした。

3. 2億の軍勢による人類の三分の一の死 9：17—19

騎兵は火のような赤、くすぶった青、燃える硫黄の色の胸当てを着けて、身を固めていました。また馬の頭はししの頭のようにであり、ししの凶暴さと力を持っていました。そして、口から火と煙と硫黄を吐き、この三つの災害によって、人類の三分の一が殺されました。この悪魔的馬には口だけでなく尾にも破壊力がありました。尾は蛇のようにであり、それに頭があって、その頭で害を加えます。蛇は悪魔を象徴している動物ですので、この馬が悪魔的存在であることを表しています。この馬は現代の兵器を表しているようにも思われます。もしそうであるなら、この災いは終末時代における世界的な戦争のことを言っているのかもしれませんが。或いは別のものかもしれませんが、いずれにしてもこの時点で生きている人の三分の一が殺される恐るべき光景が現実となるのです。

4. 悔い改めない人々 9：20, 21

これらの災害によって殺されずに残った人々は、本来ならばこの災害を神からの警告として受け止め、罪を悔い改めて、神に立ち返るべきでした。そして、神はご自分の警告を人々が受け入れて、神に立ち返ることを願われました。けれども、実際は彼らの心はあまりにもかたくななので、自分たちの罪を悔い改めようとはしませんでした。彼らは災害を与える神に心を閉ざしました。そして、引き続き悪霊どもや金、銀、銅、石、木で作られた、見ることも聞くことも歩くこともできない偶像を拝み続けたのです。またまことの神に立ち返らないで、殺人、魔術、不品行、盗みという悪い行いを続け、世界はさらに混乱していきました。

10 : 1－11 小さな巻き物

1. 一人の強い御使い 10 : 1, 2

10章の小さな巻き物と11章1—14節の二人の証人の幻は、第7のラッパが鳴る前の挿入部分です。ヨハネはここで、もう一人の強い御使いが、雲に包まれて天から降りてくるのを見ました。彼の頭上には虹があって、その顔は太陽のようであり、その足は火の柱のようでした。彼はキリストの栄光を反映する、特に強い御使いでした。御使いの手には開かれた小さな巻き物を持っていました。巻き物が開かれているとは、その内容がすでに人々に明らかにされている神のことばであるという意味です。また彼の右足は海の上に、左足は地の上に置かれていました。これは彼が地上を支配する力を持っていることを表しています。

2. 御使いの声 10 : 3, 4

この強い御使いが、ししがほえるときのように大声で叫びました。すると、7つの雷が各々声を出し、語りました。7つの雷は通常の雷ではなく、内容のあることを語ることができました。ヨハネは7つの雷が語ったことを書き留めようとしたところ、天からの声が、「7つの雷の言ったことは封じて、書きしるすな。」と言うのを聞きました。ヨハネに幻が示された主な目的は、彼が黙示録を書いて、神の啓示を教会に伝えることでした。けれども、7つの雷による啓示は人間に示すのはふさわしくないと神が判断され、ヨハネにだけ示されたのでした。神は多くのことを人間に啓示されましたが、人間に示されない事柄も多くあるのです。

3. 御使いの誓い 10 : 5－7

海と地との上に立つ御使いは、右手を天に上げて、永遠に生き、すべてのものの創造者である神に誓って言いました。「もはや時が延ばされることはない。」とは、第7のラッパによる災いの日は刻々と近づいており、もはや時間が延長されることはなく、間もなくラッパが鳴るということです。第7のラッパが鳴る日には、神の奥義である神のご計画の全体が、神のしもべである旧約の預言者や新約の使徒たちに告げられたとおりに成就するのです。神のことばは、今はまだ成就していなくても、終わりの日にはことごとく成就します。

4. 小さな巻き物 10 : 8－11

それからヨハネは天からの声が、「御使いの手にある開かれた巻き物を受け取りなさい。」と言うのを聞きました。そこで、ヨハネは御使いに、「小さな巻き物をください。」と言うと、御使いは、「それを取って食べなさい。それはあなたの腹には苦いが、あなたの口には蜜のように甘い。」と言いました。ヨハネが巻き物を食べると御使いの言う通りになりました。神のことばは、信じる者にとっては「蜜のように甘い」すばらしいものです。けれども、信じない者にとっては、神のことばは審きを宣告する苦いものです。ヨハネは、自らは神のことばのすばらしさを経験するとともに、神のさばきを宣告する苦い責任も負ったのです。ヨハネは小さい巻き物に記されている神のことばを「もろもろの民族、国民、国語、王たち」に語る使命を与えられました。

11 : 1 - 14 二人の証人の幻

1. 測りざお 11 : 1, 2

11章は黙示録の中でも最も難しい箇所の一つです。大きく分けると、この箇所を霊的に解釈する立場と字義的に解釈する立場があります。霊的解釈では聖所と二人の証人は教会ととり、時間や様々な出来事も霊的に解釈します。一方、字義的解釈は、聖所はエルサレム神殿、二人の証人は二人の個人ととり、時間や様々な出来事も字義通りにとります。ここでは、聖書に書いてある通りの内容を確認していきます。ヨハネは測りざおで、聖所と祭壇とそこで礼拝している人を測れと命じられます。神の民を測る行為は、彼らが神の祝福の中に置かれていることを表します。一方で、ヨハネは聖所の外の庭は異邦人に与えられているので測るなと命じられました。これは神を信じない者は神の祝福から除外されていることを表しています。不信者は聖なる都を42か月間、即ち3年半踏みにじります。

2. 二人の証人の預言 11 : 3 - 6

さらに、二人の証人が1260日(1か月を30日とすると42か月、3年半)、悲しみと嘆きを表す荒布を着て預言します。二人の証人は、異邦人たちが聖なる都を踏みにじっている迫害の間、神のことばを語り続けるのです。彼らはオリーブの木と燭台が表わす聖霊の力によって預言します。(ゼカリヤ4章参照) また、彼らには特別の力が与えられ、彼らに害を加えようとする者があれば、口から出る火をもって敵を滅ぼします。また、彼らが預言している間は、雨が降らないように天を閉じる力と、水を血に変える力と、あらゆる災害をもって地を打つ力をもって、地に災いをくだし、神のことばの確かさを証します。

3. 二人の証人の死 11 : 7 - 10

二人の証人が3年半の証しを終えると、底知れぬところから上ってくる獣が、二人と戦って勝ち、彼らを殺します。この獣は悪魔的な存在です。二人の死体は、不道徳で神の民を抑圧するソドムやエジプトと呼ばれる大きな都の大通りにさらされます。主もその都で十字架につけられました。地に住む多くの人々が来て、3日半の間、彼らの死体をながめていて、その死体を埋葬することを許しません。そして、神のことばと災いをもって地に住む人々を苦しめた二人の死を喜び祝って、互いに贈り物を贈り合います。彼らは自分たちの勝利に満足したのです。

4. 二人の証人の復活と昇天 11 : 11 - 14

しかし、3日半の後、人々が全く予想もしていなかったことが起こりました。それは、神から出たいのちの息が彼らに入り、彼らがよみがえり、彼らが足で立ち上がったのです。それを見た人々は非常な恐怖に襲われました。その時、二人は天から「ここに上れ。」という大きな声を聞き、雲に乗って天に上っていきました。二人の敵はその光景を見ました。またその時、大地震が起こり、都の十分の一が倒れ、7千人が死にました。生き残った人々はこれらの出来事に恐怖を覚え、まことの神の力を認めたのです。けれども、彼らはキリストを信じるまでには至りませんでした。第6のラッパから始まった第2の災いはここで終わりました。(9:12) そして、ついに第7のラッパが吹き鳴らされると、第3の災いが間もなく来るのです。

11 : 15 - 19 第7のラッパ

1. 第7のラッパ 11 : 15

第7のラッパがついに吹き鳴らされました。するとまず、天における賛美の声が聞こえます。第7のラッパによる災害は、15～16章の7つの鉢のさばきとなって現れます。その間に、12～14章の様々な幻が示されます。第7のラッパが吹き鳴らされると、天に大きな声が起こりました。その天の声は、この世の国は主なる神とキリストのものとなり、主が永遠に支配されると宣言しました。主がこの世の国を永遠に支配するとは、地上の支配と千年王国での支配と、さらには新天新地に至る永遠の支配を意味しています。20章には千年王国の終わりに短期間の神への反逆が記されていますが、それは不成功に終わります。

2. 24人の長老の礼拝 11 : 16, 17

次に、神の御前で自分たちの座に着いている24人の長老たちも、地にひれ伏して神を礼拝して、共に賛美します。彼らはまず神に感謝します。神は万物の支配者であり、常にいまし、昔います永遠のお方です。この神が、偉大な力を働かせて、地をご自分の支配下に置かれ、王となられたのです。その結果、もはや、神に逆らう地の支配者が起こることはなくなりました。24人の長老たちは、神が地を永遠に支配されたことを心から感謝し、賛美しました。

3. 神の御怒りの日 11 : 18

次に、24人の長老たちは神の御怒りの日が来たことを告げました。諸国の民の怒りとは、神への反逆です。民の怒りは邪悪なものですが、それに対する神の怒りは聖なる怒りです。神の御怒りの日は死者のさばかれる時です。同時にその日は、神を恐れかしこむすべての神のしもべたちに、神からの報いが与えられる時でもあります。そしてその日は、地を滅ぼす者どもの滅ぼされる時でもあります。地を滅ぼす者どもとは、この世を霊的に墮落させる悪魔とその手下たちのことです。

4. 天の神殿 11 : 19

それから、天にある神の神殿が開かれました。天の神殿が開かれるとは、神の栄光が現され、私達が神の御前に行く道が開かれていることを示しています。地上の神殿も契約の箱も破壊されて失われても、天には神の栄光を現す神殿があり、また神の義を現す契約の箱があるのです。その神の義とは、キリストを信じる者に与えられる新しい契約による神の義です。天の神殿が開かれたことに伴って、地上で稲妻、声、雷鳴、地震が起こり、大きな雹が降りました。これらは、神は地上に対して速やかに審きを行おうとしていることを意味しています。

12：1－9 女と竜

1. 太陽を着た女 12：1、2

第7のラッパが鳴った後、災害が実際に起こるのは15章から16章の7つの鉢のさばきによってです。ですから、12章から14章はそれまでの中間的出来事です。まず、天に一人の女が現れました。この女は神の民である真のイスラエルを指していると考えられます。太陽を着るとは神の栄光を輝かすことを意味し、月を足の下に踏むとは暗黒の力に打ち勝つことを表しています。また12の星の冠は12部族を指していると考えられます。この女はみごもって、産みの苦しみをしていました。この苦しみは神の救いがもたらされるための苦しみです。救い主は人としてイスラエルの民から生まれました。

2. 大きな赤い竜 12：3、4

次に天に大きな赤い竜が現れました。この竜は9節を見ると悪魔、サタンであることがわかります。7つの頭は悪魔の持つ狡猾な知恵を表し、10本の角は悪魔の力を表し、冠はこの世に対して悪魔が持つ支配権を表しています。竜の尾は天の星の三分の一を地上に投げ落とす力を持っていました。竜は女が子を産んだとき、その子を食い尽くすために、女の前に立っていました。悪魔はキリストに敵意を抱き、最初からキリストを滅ぼそうとしました。創世記3：15には、蛇であるサタンが女の子孫であるキリストに敵意を持ち、キリストのかかとかみつくが、キリストはサタンを滅ぼすことが預言されていますが、この幻においてもキリストに対するサタンの敵意が表わされています。

3. 女が産んだ男の子 12：5、6

女は男の子を産みました。この男の子はキリストのことです。「この子は鉄の杖をもって、すべての国々を牧するはずである」とは、キリストが主権をもってこの世を支配されることを意味しています。キリストは地上での生涯と十字架の死と復活の後、昇天され、神の右の座に着かれました。悪魔はキリストを食い尽くそうとしていたのに、それが果たせなかったのも、女である教会を迫害しようとしたのも、そこで女は荒野に逃げました。そこには神によって備えられた場所がありました。神はどんな迫害の中にあっても、神の民に逃れる場所を備えてくださるのです。1260日は11：2、3にある3年半の期間であり、異邦人が聖なる都を踏みにじり、二人の証人が預言する期間です。

4. 天での戦い 12：7－9

悪魔は天に引き上げられたキリストを攻撃しようとして天に行き、御使いと悪魔の戦いが天で起こりました。竜とその使いたちは、み使いのかしらであるミカエルと彼の使いたちと戦いました。(ユダ9、ダニエル12：1)しかし、竜たちはミカエルたちに勝つことができず、天に竜たちの居場所がなくなってしまいました。その結果、悪魔とかサタンとか呼ばれるこの巨大な竜は、彼の使いたちと共に地に投げ落とされました。悪魔は全世界を惑わす、あのアダムとエバを惑わし罪を犯させた古い蛇です。悪魔は現在も人々を惑わし、罪に誘惑しています。そして、地上に落とされた後も、最後の審判の時まで、地上で人々を惑わす働きをするのです。

12 : 10 - 18 地上に投げ落とされた竜

1. 天での賛美 12 : 10 - 12

竜である悪魔がミカエルとの戦いに負け、地上に投げ落とされた時、天に殉教者たちの賛美が起きました。それは神の救いと力と国と、キリストの権威が現れたので、神の御前で殉教者たちを訴える告発者なる悪魔が投げ落とされたからです。悪魔はもはや神の御前でキリスト者を訴えることはできなくなりました。殉教者である「兄弟たち」は小羊の血による罪の贖いを得ているので、悪魔がいくら訴えても、何の効果もありません。また、殉教者たちは死に至るまでキリストの救いをあかししました。彼らは死を通して永遠の勝利を勝ち取ったのです。天において、もはや悪魔の居場所はなくなりました。しかし、悪魔は自分の時の短いことを知り、激しく怒って地に下り、さらなる災いを起こすのです。

2. 女を追いかける竜 12 : 13、14

女が産んだ男の子であるキリストを滅ぼそうと天に行った竜である悪魔は、戦いに敗れて地に投げ落とされました。そこで悪魔は、女である教会を敵意をもって追いかけ、迫害を始めました。迫害は人間の支配者や反対者によってもたらされますが、背後には教会を滅ぼそうとする悪魔が働いています。しかし、女は大わしの翼を二つ与えられ、荒野に飛んでいき、蛇すなわち竜から逃れて神の養いを受けました。「大わしの翼」はすみやかに飛んでいくことを意味しています。「一時と二時と半時の間」は 11 章 2、3 節の 42 カ月間、1260 日であり、ダニエル 12 章 7 節が預言する大患難時代の期間です。神は教会を迫害から守り、大患難時代にも教会を養われるのです。

3. 大水を吐き出す竜 12 : 15、16

竜である蛇は、逃げていく女である教会を何とかして滅ぼそうとして、その口から水を川のように女の後ろへ吐き出し、女を大水で押し流そうとしました。「大水」とは大きな悪の力を表しています。悪魔は大きな悪の力をもって、教会を攻撃し、滅ぼそうとします。しかし、「地は女を助け、その口を開いて、竜が口から吐き出した川を飲み干し」ました。すなわち、神はあらゆる方法をもって、教会を悪魔の攻撃から守り、教会を救い出されるのです。

4. 女の子孫の残りのものと戦おうとする竜 12 : 17、18

悪魔である竜は、女である教会をどうしても滅ぼすことができないので、女に対して激しく怒りました。そこで「女の子孫の残りの者」と戦うために出て行きました。そして、竜は海べの砂の上に立ち、竜に協力する海から上ってくる獣(13 章)を待ちました。「女の子孫」とは創世記 3 章 15 節に預言されているキリストのことです。ですから、「女の子孫の残りの者」はキリストに属する者、すなわち「女」と同じ「教会」を指します。教会は、「神の戒めを守り、イエスのあかしを保っている者たち」です。教会はどんな迫害の中にも、みことばに従い、イエスはキリストであるという証しをし続ける群れなのです。

13：1－10 海から上ってきた獣

1. 海から上って来た獣 13：1、2

竜が海辺に立つと、海から一匹の獣が上ってきました。獣には十本の角と七つの頭とがありました。17:9, 12を見ると十本の角は十人の王、七つの頭も七人の王を意味しています。角にある十の冠は地上を支配する権威を表しています。獣は神をけがす存在です。またひょう、熊、ししはダニエル 7:2 以下を見るとギリシャ、メドペルシャ、バビロンの国を表していますが、黙示録ではそれらのすべてを総合した世界的国家権力を表しています。竜である悪魔はこの獣に自分の力と位と権威とを与えました。神に逆らう国家権力の背後には悪魔がいるのです。この神に逆らう国家権力は、終末時代に現れる反キリストです。

2. 竜と獣を拝む全地 13：3、4

獣の頭のうちの一つは打ち殺されたと思われましたが、その致命的な傷も治ってしまいました。これは、地上の国家権力は時には、打撃を受けて滅んだように見えても、悪魔の力によって、その権力が回復することを意味しています。それを見た全地の人々は驚き、獣である国家権力に従い、またその背後で獣に権威を与えた竜を拝みました。また彼らは獣をも拝み、「だれがこの獣に比べられよう。だれがこれと戦うことができよう。」と言って、獣を賛美しました。新約聖書の時代は皇帝崇拝が行われ、戦時中は日本でも天皇崇拝が行われました。そして終末時代にも、地上の権力者への崇拝が行われます。地上の権力者を崇拝する国家の背後には、神に逆らう悪魔の力があるのです。

3. 神と聖徒たちに敵対する獣 13：5－7

この獣は傲慢なことを言い、自分が神であると言って、まことの神をけがします。このような神をけがす口は、背後にいる悪魔から与えられたものです。獣は42カ月間、すなわち3年半の大患難時代に活動する権威が与えられました。神は大患難時代に悪魔が働く期間を定め、この期間も支配しておられます。獣は神をけがし、神の御名をののしり、また幕屋、すなわち天に住む者たちをののしりました。幕屋や天に住む者たちは神と共に天で住む神の民、すなわち教会を表しています。神をののしる者は、教会もののしるのです。獣は聖徒たちを迫害し、その結果、多くの殉教者が出ます。獣にはこの世界を支配する権威が与えられました。

4. 聖徒の忍耐と信仰 13：8－10

獣がこの世界を支配すると、地に住む者で、ほふられた小羊のいのちの書に名前が書き記されていない者はみな、獣を拝むようになります。そして、神はいのちの書に名の書きしるされている信者に対して、「耳のある者は聞きなさい。」と言って、10節のことばに注意するように警告を与えられます。その警告とはまず、「とりこになるべき者は、とりこにされていく。」です。これは迫害により信者の中で捕えられる者が必ずいるので、もし自分が捕えられてもあわてず、心の備えをしていなければならないということです。もう一つは「剣で殺す者は、自分も剣で殺されなければならない。」です。これは、信者は迫害の中でも剣を持って抵抗してはいけないこと、また剣をもって迫害する者は、やがて自らが剣によって滅ぼされるということです。信者が迫害の中でも忍耐するためには、すべてを支配しておられる全能の神を信じる信仰が必要なのです。

13：11－18 地から上ってきた獣

1. 地から上って来た獣 13：11－13

海から上って来た第一の獣(国家権力者である反キリスト)とは別に、地から上って来た第二の獣をヨハネは見ました。この第二の獣は偽預言者です。(16:13)この獣には小羊のような二本の角がありました。第一の獣とは異なり、第二の獣は外見上は優しく見えます。しかし、悪魔である竜のように偽りを語り、人々を惑わすのです。第二の獣は、第一の獣から悪魔の権威を引き継ぎ、第一の獣のために働きます。偽預言者は反キリストである政治的権力者に協力し、自分も権力を得ようとします。そして、偽預言者は全世界の人々に第一の獣である反キリストを拝ませました。また人々を惑わせるために、火を天から地に降らせるような大きなしるしを行いました。

2. 第一の獣の像と殉教 13：14、15

第二の獣である偽預言者は、奇跡をもって人々を惑わし、第一の獣である反キリストの権力者の像を造るように人々に命じました。そして、偽預言者は魔術的な力によって、反キリストの像に息を吹き込み、その像がものを言うことさえもできるようにしました。そして、人々にこの像を拝ませました。地上の人々は偽預言者の教えと力に惑わされ、反キリストの獣の像を礼拝しました。しかし、キリストに従う神の民はこの獣の像を拝みませんでした。そこで、偽預言者は像を拝まないキリスト者を殺させ、その結果、多くのキリスト者が殉教しました。

3. 第一の獣の刻印 13：16、17

また偽預言者は、反キリストの像を拝むすべての者の右の手か、額かに第一の獣の刻印を受けさせました。そのことによって、彼らが悪魔と反キリストに属する民であることが示されたのです。7章ではキリスト者の額には神の印が押され、彼らが神の民であることが表わされました。人間は神の支配下にあるか、悪魔の支配下にあるか、どちらかを選ばなければならないのです。どちらも選ばない中間の道はありません。偽預言者が人々に獣の刻印を受けさせた目的は、刻印のない者には買うことも売ることもしないようになるためでした。このようにキリスト者を村八分にすることによって、彼らが生きることができないようにしたのでした。ここに終末におけるキリスト者の苦難と忍耐があります。

4. 第一の獣の名の数字 13：18

ヨハネはこの状況下で、「ここに知恵がある。」とキリスト者を励まします。思慮ある者が、霊的知恵をもって獣の名の数字を読み解けば、獣の正体がわかるのです。獣の名前は同時に数字を表していました。そして、その数字は人間を指しており、その数字は666でした。666は各けたとも完全数の7よりも一つ少ない数であり、反キリストを表し、その反キリストは神ではなく人間であることを表しています。キリスト者は偽預言者や反キリストに惑わされず、たとえ売買ができず生活が困難になっても、また殉教が起こっても、偶像礼拝をせず、神の印を押されている者として、まことの神のみを拝み、まことの神のみに従うのです。

14：1－7 小羊と14万4千人

1. 小羊と14万4千人 14：1

ヨハネはまた別の幻を見ました。それは小羊イエスがシオンの山の上に立っている幻です。シオンの山とは天における神の都を指しています。また小羊とともに14万4千人の人たちがいました。14万4千人は7：4に記されているすべての神の民のことです。彼らの額には小羊の名と小羊の父の名とが記してありました。彼らは小羊の血によって贖われ、小羊イエスと父なる神の所有の民となったのです。これは、13：16の獣の名の刻印を右の手か額に押された人々と対照的になっています。終末においては、人々はどちらかの印を押され、神か悪魔かのどちらに属するのかが明らかにされるのです。

2. 新しい歌 14：2, 3

ヨハネは天からの声を聞きました。その声は大水の音のようであり、また激しい雷鳴のようでもあり、また立琴をひく人が立琴をかき鳴らしている音のようでもありました。それは14万4千人の賛美の歌声でした。彼らは御座の前と、四つの生き物および長老たちの前とで、新しい歌を歌っていました。4つの生き物は全被造物の代表であり、24人の長老は全聖徒の代表です。彼らも5：9で新しい歌を歌っています。新しい歌は神を賛美する霊の歌であり、この歌は地上から贖われた神の民だけが歌うことができ、そのほかの人はこの歌を学ぶことができませんでした。

3. 神の民の特徴 14：4, 5

4節、5節には14万4千人の神の民の特徴が記されています。第1の特徴は「女によって汚されたことのない童貞の人々」であることです。これはまことの神のみを礼拝し、偶像礼拝という霊的不品行を行わず、霊的に純潔を保っている者であることを表しています。第2は「小羊が行くところにはどこにでもついていく」というキリストへの服従です。第3は「神および小羊にささげられる初穂として、人々の中から贖われた」こと、すなわちキリストの血によって贖われ、神の民とされたことです。第4は「彼らの口には偽りがなかった」という偽りのない真実な者であることです。第5は「彼らは傷のない者である」こと、すなわちキリストの血によってきよめられ、神にささげられるにふさわしい者であるということです。

4. 神の審きの告知 14：6, 7

6節から20節は6人の御使いが神のさばきを宣告します。ヨハネは「もうひとりの御使いが中天を飛ぶのを見」ました。「もう一人」とは8：2の7人の御使いに加えてという意味です。また中天とは天の一番高いところという意味です。この御使いは地上のすべての人に伝える永遠の福音を携えていました。「永遠の福音」は、神がついに義をもって世界をさばき、神の支配を完成されるという福音であり、神のさばきを意味します。御使いは「神を恐れ、神をあがめよ。神のさばきが来たからである。天と地と海と水の源を創造した方を拝め。」と大声で言いました。神のさばきは、もはや一刻の猶予もありません。だから、「まことの神を恐れ、罪を悔いて、神を礼拝せよ」と永遠の福音をもって、神は最後の最後まで人々を招かれるのです。

14：8－13 神のさばきと救い

1. 大バビロン 14：8

第2の御使いがやって来て、大バビロンの滅亡を告げました。大バビロンとは神に反逆する都市の象徴であり、神に敵対するこの世の勢力のことです。大バビロンは「激しい御怒りを引き起こすその不品行のぶどう酒をすべての国々の民に飲ませた者」です。不品行のぶどう酒とは、道徳的腐敗と共に霊的偶像礼拝を指しています。神に敵対する勢力である大バビロンは、すべての国民にこのような悪影響を与えました。その結果、大バビロンの悪影響を受け、霊的・道徳的に墮落した人々は、大バビロンが神の御怒りを受けて倒れるとき、彼らも神の激しい御怒りを受けることになるのです。

2. 神の怒り 14：9，10

続いて第3の御使いがやって来て、獣とその像を拝み、自分の額か手かに刻印を受けている者に対する神のさばきを、大声で告げました。「そのような者は、神の怒りの杯に混ぜ物なしに注がれた神の怒りのぶどう酒を飲む。」神の怒りのぶどう酒を飲むとは、神の怒りを受けることを意味し、混ぜ物なしとは、神のあわれみや恵みによって和らげられていないという意味です。また「火と硫黄」はゲヘナ(地獄)における激しい苦しみを表しています。彼らは聖なる御使いたちと小羊イエスとの前で、ゲヘナの苦しみを味わうことになるのです。

3. 聖徒たちの忍耐 14：11，12

反キリストの獣を拝み、神に逆らった者に対する神のさばきは、ゲヘナにおいて永遠に続きます。彼らの苦しみは「昼も夜も休みを得ない」ものであり、絶え間ない不安と疲労が続きます。これは天国における永遠の安息と祝福と全く対照的です。神の愛が無限であるのと同様に、神の義は不変です。キリストによって示された神の愛を受け入れない者に対しては、神の義による審判を受けなければならないのです。神に逆らう者の永遠の結末と、神に従う者の永遠の結末を覚えるときに、患難時代に一時的に苦しみを受ける聖徒たちの忍耐が大切であることがわかります。聖徒たちの忍耐とは、「神の戒めを守り、イエスに対する信仰を持ち続ける」ことです。

4. 主にある死者の幸い 14：13

ヨハネは天からの次の声を聞きました。「書き記せ。『今から後、主にあって死ぬ者は幸いである。』」これは迫害によって殉教する者に対する神の慰めと励ましのメッセージです。「今から後」とありますが、これはあらゆる時代の主にあって死ぬ者にも適用します。また御霊も言われます。「しかり、彼らはその労苦から解き放されて休むことができる。彼らの行いは彼らについていくからである。」聖徒たちは、天においてこの世の労苦から解放されて安息を得ることができます。また聖徒は地上での信仰に基づく行いに対する報いを天で受けます。だからこそ、地上において神の戒めを守り、イエスに対する信仰を持ち続けることが大切なのです。

14：14－20 再臨に伴うキリストのさばき

1. 人の子のような方 14：14

ヨハネはまた幻を見ました。それは、「白い雲が起こり、その雲に人の子のような方が乗っておられた」幻です。「人の子のような方」とはキリストのことであり、ヨハネは黙示録1：13ですでに人の子のような方を見えています。またダニエルも幻の中で、ヨハネが見たのと同じ「天の雲に乗る人の子のような方」を見ました。(ダニエル7：13)キリストは頭に、いばらの冠ではなく、勝利を表す「金の冠」をかぶっておられます。また手にはさばきの刈り入れをするための「鋭いかま」を持っておられました。これはキリストの再臨に伴う究極的なさばきを表しています。

2. 第4の御使い 14：15, 16

すると第4の御使いが、神がおられる天の聖所から出てきて、大声でキリストにさばきを懇願しました。御使いは、父なる神のみこころをキリストに伝えたのです。「地の穀物は実った」とは、この世が霊的にも道徳的にも腐敗しきったことを表しています。それは神のさばきの時が来たことを意味していました。そこで、キリストは地にかまを入れ、さばきの刈り入れを行われました。イエスはヨハネ5：27で、「また、父はさばきを行う権を子に与えられました。子は人の子だからです。」と言われています。そのとおり、父なる神のご意志に従って、キリストはさばきを行われたのです。

3. 第5と第6の御使い 14：17, 18

次に第5の御使いが鋭いかまを持って、天の聖所から出て来ました。すると「火を支配する権威を持った」第6の御使いが、祭壇から出て来ました。火を支配する権威とはさばきを行う権威のことであり、また祭壇から出て来たとは、神のさばきがなされるように祈った聖徒たちの祈りに答えて行動したことを表しています。第6の御使いは、鋭いかまを持つ第5の御使いに対して、さばきを行うようにと大声で叫びました。「ぶどうはすでに熟している」も、この世が霊的にも道徳的にも腐敗しきったことを表しています。地のぶどうは罪に墮落した人間を表しています。

4. 神の怒りの酒ぶね 14：19, 20

そこで第5の御使いは地にかまを入れ、地のぶどうを刈り集めました。そして、神の激しい怒りの大きな酒ぶねに投げ入れました。そして、その酒ぶねは都の外で踏まれました。酒ぶねを踏むとは神のさばきが行われることを意味します。また都とは地上のエルサレムのことだと考えられます。酒ぶねが踏まれると血が流れ、馬のくつわに届くほどの大量の血が流れ出て、1600スタディオン（296キロ）に広がりました。これは、16:16と19:19におけるハルマゲドンの戦いによって、キリストと戦う者が滅ぼされ神のさばきを受けることを表していると考えられます。またこの神のさばきは、イスラエルの限られた範囲だけでなく、全地に及び、すべての罪人がさばかれることを意味しています。

15：1－8 7つの金の鉢

1. 7人の御使い 15：1、2

15章では7つの鉢の災害の準備が記され、16章で7つの鉢の災害が実際に起こります。ヨハネは1節で、7人の御使いが最後の7つの災害を携えている、巨大な驚くべきしるしを見ました。神の激しい怒りは、この最後の7つの災害によって目的が達成されるのです。さらにヨハネは「火の混じった、ガラスの海のようなもの」を見ました。火は神のさばきを意味しているのです、これは神の聖さから発する神のさばきを表しています。そしてその海のほとりに、「獣と、その像と、その名を示す数字とに打ち勝った人々が、神の立琴を手にして」立っていました。この人たちは、13章で獣によって殺された殉教者です。彼らは獣を拝まず、死に至るまで忠実だった勝利者です。

2. モーセの歌と小羊の歌 15：3、4

殉教者たちは、神の立琴を手にして、神の御前で賛美の歌を歌っていました。「モーセの歌」は旧約の出エジプトの勝利を表し、「小羊の歌」は新約のキリストの十字架と復活による勝利を表しています。それらはともに神の偉大さを表す賛美です。殉教者たちは、神の創造と救いのみわざの偉大さを覚えて、主を賛美します。また神の道は正しく、真実であり、「もろもろの民の王よ」と言って、神がすべての国民の王であることを告白します。またすべての国民は神を恐れ、御名をあがめるべきであり、主だけが聖なる方であることを告白します。そして、すべての民は神のさばきの正しさを知って、神の御前にひれ伏すことを告白し、神を賛美します。

3. 7つの災害 15：5、6

その後、ヨハネは「天にある、あかしの幕屋の聖所が開いた」のを見ました。天の聖所は聖なる神のおられるところです。そしてその聖所から「7つの災害を携えた7人の御使い」が出て来ました。御使いが聖所から出て来たとは、彼らが携える7つの災害によるさばきは、神の聖さから出ており、正しいさばきであることを表しています。御使いは、「きよい光り輝く亜麻布」を着ていました。これは御使いの聖さと正しさを表しています。また「胸には金の帯」を締めていましたが、金は神の栄光を表し、御使いが行う正しいさばきによって、神の栄光が現されることを意味すると考えられます。

4. 7つの金の鉢 15：7、8

すると、全被造物の代表である四つの生き物の一つが、「神の怒りの満ちた7つの金の鉢」を7人の御使いに渡しました。御使いたちに鉢が渡されることによって、彼らが携えていた災害を行う権威が与えられたのです。御使いたちが聖所から出て来る時、聖所は神の栄光と神の大能から立ち上る煙で満たされていました。煙は神の尊厳を表しています。この煙のため、7人の御使いたちの7つの災害が終わるまでは、だれも聖所に入ることができませんでした。これは、神のさばきが全部終わるまで、だれもさばきを妨げることができないことを表しています。神のさばきが全部終わる時、神の救いの計画が成就するのです。

16 : 1-7 最後の7つの災害

1. 第1の鉢 16 : 1、2

いよいよ最後の7つの災害が始まります。これらの災害はエジプトで起こった十の災害やラッパの災害と似ていますが、今回の災害は最終的な神のさばきとして起こります。ヨハネは、「行って、神の激しい怒りの7つの鉢を、地に向けてぶちまけよ。」と聖所から7人の御使いに向かって語る神の大きな声を聞きました。いよいよ神の怒りが注ぎ出されます。そこで、第1の御使いが出て行き、鉢を地に向けてぶちまけました。すると、獣の刻印を受けている人々と、獣の像を拝む人々に、ひどい悪性のはれものことができました。出エジプトの時は、エジプト人に悪性のはれものが臨みましたが、今回は悪魔に従うすべての人にこの災いが及ぶのです。

2. 第2の鉢 16 : 3

次に第2の御使いが鉢を海にぶちまけました。すると、海は死者の血のような血になりました。その結果、海の中の生物は呼吸ができなくなり、全滅します。エジプトでもナイル川が血となり、第2のラッパの時も海の三分の一が血になり、その中の生き物が死にました。しかし、今回の災害は世界的規模で起こります。地球の約7割が海なので、海に対する災いは、人を含めすべての生き物に大きな影響を及ぼします。

3. 第3の鉢 16 : 4、5

次に第3の御使いが鉢を川と水の源にぶちまけました。するとすべての川と水の源が血になりました。第3のラッパの時は川の水の三分の一だけが「苦よもぎ」のようになったことと比較すると、さばきの厳しさがわかります。このさばきの結果は記されていませんが、人々は水が飲めなくなり、多くの人が死んだことが想像されます。するとヨハネは水をつかさどる御使いの声を聞きました。御使いは、神は永遠に存在される聖なる正しい方であると告白します。そしてその理由として、川と水の源を血に変えるさばきは正しいものであったことを伝えました。

4. 正しいさばき 16 : 6、7

水をつかさどる御使いは、さらに神のさばきの正しさを告げます。悪魔に従う者たちは多くの聖徒たちと預言者たちの血を流しました。その行いに対するさばきとして、その血を彼らに飲ませたことは、神のさばきとしてふさわしいと御使いは言いました。水をつかさどる御使いの告白に対して、祭壇から出てきたもう一つの声が「しかり」と応答しました。8 : 3では祭壇に対してすべての聖徒の祈りがささげられていました。祭壇は、神のさばきは真実で、正しいさばきであると言いました。第2と第3の鉢のさばきによって、世界のすべての水は血となったのです。

16 : 8 - 14 最後の7つの災害

1. 第4の鉢 16 : 8、9

第4の御使いが鉢を太陽に向けてぶちまけました。すると太陽は火で人々を焼くことをゆるされました。第4のラッパの時は太陽は暗くなりましたが、ここでは逆に太陽は熱くなり、激しい太陽の炎熱で人々は焼かれました。8節9節の「人々」には冠詞が付いていますので、この人々は2節の悪魔に従う人々のことを指していると考えられます。神は太陽の炎熱をもって、悪魔に従う者を懲らしめられるのです。彼らはこの災害を経験して悔い改めるべきでした。しかし、彼らはますます心をかたくなにし、悔い改めず、かえって神に対してけがしごとを言いました。

2. 第5の鉢 16 : 10、11

第5の御使いが鉢を獣の座にぶちまけました。獣は悪魔に従うこの世の支配者である反キリストです。すると獣の国は暗くなりました。これは第5のラッパによる暗黒やエジプトの暗やみの災いに対応しています。しかし、この時は以前のような限定的な暗やみではなく、全世界が暗やみとなり、その暗やみは人々に苦しみをもたらし、人々は苦しみのあまり舌をかみました。そして、その苦しみとはれものにとゆえに、人々は天の神に対してけがしごとを言い、この時も心をかたくなにして悔い改めようとはしませんでした。彼らは神に逆らい続けるのです。

3. 第6の鉢 16 : 12

第6の御使いが鉢を大ユーフラテス川にぶちまけました。するとユーフラテス川の水は、日の出る方から来る王たちに道を備えるために、かれてしまいました。日の出る方から来る王たちとは、東の王たちと考えることもできますが、ここでは終わりの時に現れる悪魔に従うこの世の勢力を象徴的に表していると考えられます。彼らは乾いたユーフラテス川を通して、神と戦うためにやってくるのです。

4. 3つの汚れた霊 16 : 13, 14

次にヨハネは竜の口と、獣の口と、偽預言者の口から、かえるのような汚れた霊どもが三つ出て来るのを見ました。竜は悪魔であり、獣は悪魔に従うこの世の支配者である反キリストです。また偽預言者は13章では反キリストの獣に従うもう一匹の獣です。終わりの時には悪魔と、この世の支配者である反キリストと、宗教的指導者である偽預言者の三者が一体となって働くのです。三つの悪霊は奇跡を行い、人々を惑わします。そして悪霊は全世界の王たちのところに出て行き、神の大いなる日の戦いに備えて、彼らを集めるのです。神の大いなる日とは、キリストが再臨され、神のさばきが行われる日です。彼らはその時、キリストの軍勢と戦うのです。

16 : 15 - 21 最後の7つの災害

1. ハルマゲドン 16 : 15、16

15節はキリストが語られた警告です。「見よ。わたしは盗人のように来る。」キリストは突然、予期しない時に再臨され、霊的備えをしていない者には神のさばきが下るのです。しかし、キリストの再臨に対して霊的備えをしている者は幸いです。彼らは、霊的に目を覚ましてキリストを待ち望み、キリストの義の衣を身に着け、神の前に罪が赦されている人です。16節では、汚れた霊たちが地上の王たちをハルマゲドンに集めることが記されています。ハルマゲドンがどこかについては様々な意見がありますが、最も一般的な意見は「メギドの山」です。ハルは山、マゲドンはメギドを意味するからです。メギドはカルメル山の南東にあるエストラエドン平原にある町で、しばしば大きな戦いが起こった場所です。あるいはハルマゲドンは象徴的な地名かもしれませんが、いずれにしても終わりの時に、神と悪魔の勢力がここで一大決戦を行うのです。

2. 第7の鉢 16 : 17、18

第7の御使いが鉢を空中にぶちまけました。空中は悪魔たちの住む場所です。最後の災害は悪魔の勢力に影響を与えます。すると、神の大きな声が御座を出て、聖所から出てきて、「事は成就した。」と言いました。一連の災害がついに完了するのです。神の声の後に、いなくとも声と雷鳴があり、大きな地震が起こりました。この地震は、人間が地上に住んで以来、かつてなかったほどのもので、それほど大きな強い地震でした。

3. 大きな都と大バビロン 16 : 19、20

この激しい大地震によって、「あの大きな都は3つに裂かれ、諸国の民の町々は倒れ」ました。「あの大きな町」とは11:8に象徴的に記されている、神に反逆する世界のことで「大バビロン」とも呼ばれます。「3つに裂かれる」とは完全に崩壊したという意味です。神に反逆する人々は、終わりの日に、神の激しい怒りのぶどう酒の杯を与えられ、さばかれるのです。またこの大地震によって、島はすべて逃げ去り、山々は見えなくなりました。これは、大地震によって地球全体が外見的に激しく変わることを意味しています。

4. 大きな雹 16 : 21

また、1タラントほどの大きな雹が人々の上に天から降ってきました。雹の災害は、エジプトへの第7の災害によっても臨みました。しかしこの時の雹の災害は、エジプトの時とは比較にならないほど激しく、雹の重さは1タラント、約35キログラムにもなりました。このような重い雹が天から降ってくることにより、地震によってもなお残っていたものを破壊しました。その結果、雹による災害は非常に激しいものとなりました。しかし、この災害によって示された神の力と主権の偉大さにもかかわらず、人々は依然として悔い改めようとはせず、逆に神にけがしごとを言いました。

17 : 1-6 大淫婦の姿

1. 大淫婦 17 : 1

17章と18章は、第7の鉢によってもたらされた大バビロンに対するさばきを詳しく述べています。17章では大淫婦に象徴される大バビロンに対するさばきの宣告が、18章では大バビロンの滅亡が記されています。7つの鉢を持つ御使いの一人がヨハネの所に来て、「ここに来なさい。大水の上にすわっている大淫婦へのさばきを見せましょう。」と言いました。大水とは15節を見ると、「もろもろの民族、群衆、国民、国語」を指していることがわかります。また大淫婦は5節を見ると、その名が「大バビロン」であることがわかります。すなわち大淫婦とは、神に反逆する世界である大バビロンそのものであり、大バビロンは全世界を支配しているのです。

2. 大淫婦の影響力 17 : 2

「地の王たち」とはこの世の支配者たちのことであり、「この女と不品行を行う」とは、この世の支配者たちが大バビロンに協力して、神に反逆していることを表しています。不品行とは偶像礼拝とそれに伴う道徳的墮落を意味しています。この世の指導者たちは、偶像礼拝を行い、道徳的に墮落し、神に逆らい、悪魔の支配下に置かれているのです。しかも、大淫婦の影響はこの世の支配者にとどまらず、「地に住む人々」にも及びます。終末の時代には、キリストを信じない世界中の人々が、神に背き、偶像を礼拝し、不道徳な行為に陥ってしまうのです。

3. 大淫婦の墮落 17 : 3、4

御使いはヨハネを荒野に連れていきました。するとヨハネは大淫婦が緋色の獣に乗っているのを見ました。その獣は神をけがす名で満ちており、7つの頭と10本の角を持っていました。そのことから、この獣が13章1節に出てくる海から上って来た獣であることがわかります。この獣は神に逆らう国家権力である反キリストです。大バビロンは反キリストの力をもって、人々を惑わし神に逆らうのです。大淫婦が着ている紫と緋の衣、身に飾っている金と宝石と真珠、手に持つ金の杯は、物質的に豊かでぜいたくな暮らしを表しています。しかし手に持つ金の杯は、憎むべきものや自分の不品行の汚れでいっぱいでした。大バビロンは物質的に豊かであっても霊的に墮落しきっていたのです。

4. 大バビロン 17 : 5、6

大淫婦の額には「意味の秘められた名」が書かれていました。そしてその名は「すべての淫婦と地の憎むべき者との母、大バビロン」でした。大バビロンは神に反逆する世界を生み出す母であり、霊的道徳的墮落をもたらす中心地なのです。大淫婦はその大バビロンを象徴しています。大淫婦は、聖徒たちの血とイエスの証人たちの血に酔っていました。大バビロンにおいて、多くの殉教者たちの血が流されたのです。ヨハネはこの大淫婦の姿を見て非常に驚きました。それは、大淫婦がまださばかれず、神に反逆し続けていたからです。

17:7-12 大淫婦の姿

1. 大淫婦と獣の秘儀 17:7, 8

御使いは、驚くヨハネに対して、大淫婦と獣の秘儀を話そうと告げました。秘儀とは奥義のことで大淫婦と獣が象徴している意味のことです。そしてまず獣の秘儀を話し、その後で大淫婦について話します。御使いは「獣は、昔いたが、今はいません。しかし、やがて底知れぬ所から上って来ます。」と言いました。獣は一度死ぬが、再び底知れぬ所から上って来るとは、13:3の「獣の頭の一つが打ち殺されたが、その致命的な傷が治ってしまった」ことと対応しています。底知れぬ所とはサタンの住みかです。獣はその起源において悪魔的であるのです。死んだ獣が再び現れたのを見て、いのちの書に名が記されていない者は驚き、獣に従います。獣とは神に逆らう反キリストです。

2. 七つの頭 17:9, 10

「ここに知恵の心があります。」とは、これから示される啓示を理解するためには霊的知恵を必要とするということです。「7つの頭とは、この女がすわっている7つの山で、7人の王たちのことです。」と御使いは言いました。7つの山とは直接的にはローマの7つの丘を指し、7人の王は7人のローマ皇帝を指しています。また、「5人はすでに倒れたが、ひとは今おり、ほかのひとはまだ来ていません。」も、直接的にはローマ皇帝を指しています。しかし、7は完全数であり、7人の王には象徴的な意味があります。彼らは神に反逆する政治的支配者である反キリストです。終末において現れる反キリストは一時的にこの世を支配します。

3. 獣と頭 17:11

獣と獣が持つ7つの頭が意味する7人の王は、両方とも同じ反キリストを表しています。そこで、ここでは「獣は8番目でもあります、先の7人のうちのひとりです。」と言われます。つまり、反キリストは歴史の中で今までも何人も現れており、そして終末時代においても現れるのです。そして、終末時代に現れる反キリストは、勢力を拡大し、人々を従えて神に徹底的に反逆します。しかし、最後には彼は神のさばきを受けて、滅びるのです。

4. 十本の角 17:12

次に御使いは、獣の「十本の角は、十人の王たちで、彼らはまだ国を受けてはいません」と語りました。十人の王も、十は完全数であり、終末時代に現れる獣に協力する支配者を象徴的に表しています。すなわち、7人の王も十人の王も王を持つ獣も、世の終わりまで、滅亡と再生を繰り返す世界的な支配権を持つ悪魔的政治勢力反キリストを表しているのです。反キリストは終末時代に再び現れて勢力を拡大し、神に反逆します。しかし、それは「一時だけ王の権威を受ける」だけであり、やがて永遠に滅びるのです。

17 : 13 - 18 神のご計画

1. 獣の軍勢と小羊との戦い 17 : 13, 14

十人の王は心をつにして、自分たちの力と権威を獣に与えました。十人の王も獣も反キリストですが、獣は十人の王の指導者となって小羊キリストと戦います。反キリストとキリストとの戦いはキリストが勝利されます。なぜなら小羊キリストは、主の主、王の王だからです。この戦いは19 : 11 ~ 21に記されているハルマゲドンの戦いのことだと考えられます。小羊とともにいる召された者、選ばれた者、忠実な者とはキリスト者のことです。彼らはキリストの勝利にあずかるのです。

2. 大淫婦の滅亡 17 : 15, 16

大淫婦がすわっている大水とは、「もろもろの民族、群衆、国民、国語」です。大淫婦が象徴する大バビロンはもろもろの民族や国民を支配しているのです。17 : 3ではこの女は獣に乗っており、女と獣は一致協力して神に逆らい、自分たちの栄華を誇っていました。しかし、最後には内部分裂が起き、十人の王と獣は女を憎み、滅ぼしてしまいます。栄華を誇った世界帝国大バビロンは、このように内部分裂によって滅びます。神に背く人間の文明社会は、やがて人間によって滅ぼされていくのです。

3. 神の計画 17 : 17

このような悪の勢力の中で内部分裂が起こり、十人の王と獣が大淫婦を滅ぼす背後には、神の計画がありました。大バビロンである大淫婦を滅ぼすことは神のみこところでした。そして、そのために十人の王の心をつにし、獣を指導者とし、反キリストである彼らを用いて大淫婦へのさばきを行われたのです。しかし、反キリストの勝利は、「みことばの成就するときまで」です。最後の審判においては、神は反キリストをさばかれ、神おひとりが勝利を収められるのです。

4. 大きな都 17 : 18

滅ぼされた女は、「地上の王たちを支配する大きな都」大バビロンでした。ヨハネの時代はローマ帝国が当時の世界を支配する世界帝国でした。その支配下にはローマに支配された国々とその王たちがいました。しかし、大ローマ帝国もやがて歴史の中で滅びました。その後も、世界を征服した支配者が現れ、世界帝国が現れては消え去りました。やがて終末時代においては、神に逆らう一大勢力が世界を支配します。しかし、神はやがて神に反逆する全世界をさばかれるのです。そして、そのあとに神の新しい聖なる都、新しいエルサレムが現れるのです。

1. 大バビロン滅亡の宣言 18 : 1 ~ 3

大きな権威を持つ御使いが、神の栄光を帯びて天から下ってきました。御使いは大バビロン滅亡を宣言しました。大バビロンは、かつては繁栄をきわめ、多くの人が住んでいました。けれども、大バビロンは倒れ、全く荒れ果てて住む人がいなくなり、悪霊どもの住まいとなるのです。3 節は大バビロンが滅亡した理由を述べています。それは、大バビロンが自ら罪を犯しただけでなく、すべての国々の民と王たちと商人たちをも巻き込み、彼らにも罪を犯させたからです。地上の人々は、大バビロンの罪の影響を受け、霊的不品行である偶像礼拝を行い、道徳的に墮落し、神に逆らって物質的繁栄のみを求めたのです。

2. 神の民への警告 18 : 4, 5

次にヨハネは、天からの声が神の民に語りかけるのを聞きました。それは、大バビロンの罪と災害を受けないために、大バビロンから離れるようにとの警告です。大バビロンの罪の影響力は強いので、神の民も大バビロンに近づき妥協するならば、罪に陥る危険性が大きいからです。Ⅱコリント 6 : 14 の「不信者とはつき合わぬくびきをいっしょにつけてはいけません。」の助言は、いつの時代も神の民に必要なのです。大バビロンの罪は積み重なって天にまで届く大きさとなっていました。神は人間が犯した罪を決して忘れることなく覚えておられます。だから、人は種を蒔けば、その刈り取りもすることになるのです。

3. 御使いたちへの助言 18 : 6

6 節 ~ 8 節は、神のさばきを執行する御使いたちに対する天からの声です。神のさばきは「彼女が支払ったものをそのまま彼女に返す」ことでした。人は自ら犯した罪に対する報いを受けるのです。しかも、「彼女の行いに応じて 2 倍にして戻しなさい。彼女が混ぜ合わせた杯の中には、彼女のために 2 倍の量を混ぜ合わせなさい。」と言われます。それは大バビロンの罪があまりにも大きかったからです。2 倍の量のさばきとは、あわれみの余地の全くない神の怒りのさばきが下されるということです。

4. 大バビロンへの神のさばき 18 : 7, 8

大バビロンは「自分を誇り、好色にふけたと同じだけの苦しみと悲しみ」を罰として受けます。大バビロンはおごり高ぶり、好色にふけり、ぜいたくを楽しみ、自分には悲しみなどないと豪語しました。それに対する彼女への神のさばきは、苦しみと悲しみでした。神は一日のうちに、死病、悲しみ、飢えなどの様々な災害をもって、彼女を焼き尽くし、滅ぼされます。神の力強いさばきの前に、大バビロンは一瞬のうちに滅ぼされるのです。

1. 王たちの嘆き 18 : 9, 10

9節～19節は大バビロンの滅亡を見て嘆く、王たち、商人たち、海運業者たちの姿が記されています。まず、彼女と不品行を行い、好色にふけた地上の王たちの嘆きが記されます。王たちは大バビロンが火で焼かれる煙を見て、泣き悲しみます。しかし、王たちは大バビロンのために嘆いたのではなく、自分たちがもはや大バビロンから利益を得ることができなくなったので嘆いたのです。彼らは彼女の苦しみが自分の身にも及ぶのを恐れて、遠く離れて立っていました。彼らは傍観者であり、大バビロンへのさばきを対岸の火事としてしか見るができなかったのです。

2. 商人たちの嘆きⅠ 18 : 11～13

11節から17節前半までは、地上の商人たちの嘆きが記されています。商人たちも大バビロンのために嘆いたのではなく、大バビロンが滅びた結果、もはや自分たちの商品を買う者がいなくなったことを嘆いたのです。大バビロンはぜいたくを尽くし、様々なものを商人から買いました。それらは、高価な貴金属、高価な布製品、高価な木材、高価な装飾品、様々な香料、飲食料、家畜、奴隷です。「人のいのち」は奴隷と同じ意味です。ローマ帝国ではローマ人はぜいたくをきわめました。またローマ帝国では6千万人の奴隷がいて、彼らがローマの文明を支えていました。しかし、ローマは滅びました。終末時代の大バビロンもどんなに栄えても、罪に対する神の報いを受け、一瞬のうちに滅びるのです。

3. 商人たちの嘆きⅡ 18 : 14～16a

14節は直接大バビロンに対して語られます。「あなたの心の望みである熟したくだものは、あなたから遠ざかってしまい」とは、大バビロンのぜいたくな生活は消えてなくなるという意味です。あらゆる派手なもの、ぜいたく品は消え失せ、はなやかな生活は過ぎ去ります。商人たちはそれまで大バビロンに商品を売り、多くの富を得ていました。しかし、大バビロンが滅んだ結果、もはや彼女から富を得ることができなくなってしまいました。商人たちはそのことを嘆いたのです。彼らも王たちと同様、彼女の苦しみが自分の身にも及ぶのを恐れて、遠く離れて立っていました。商人たちもまた傍観者であり、大バビロンへのさばきを対岸の火事としてしか見るができませんでした。

4. 商人たちの嘆きⅢ 18 : 16b～17a

商人たちも王たちの同様に、「わざわいが来た。わざわいが来た。」と嘆きました。商人たちは、大バビロンが高価な衣服を着て、高価な貴金属を身に着けていた大きな都であったことを語ります。ところが、「あれほどの富が、一瞬のうちに荒れすたれてしまった」ことに驚きます。どんなにばくだいな富を持ち、この世の栄華を誇っていたとしても、神に逆らう人間の世界は、神のさばきを受ければ一瞬のうちに滅んでしまうのです。

1. 海運業者たちの嘆き 18 : 17b~19

17節後半から19節は、海運業者たちの嘆きが記されています。彼らは海上交通に従事する者であり、彼らも大バビロンによって大きな利益を得ていたのです。彼らも傍観者として大バビロンから遠く離れて立ち、大バビロンへのさばきを対岸の火事としてしか見ていませんでした。彼らにとって、物質的に繁栄する大バビロンはすばらしい都でした。しかし、大バビロンにわざわいが来て滅んだ結果、もはやこの大きな都から富を得ることができなくなってしまいました。海運業者たちはそのことを嘆き悲しんだのです。彼らは自分たちの身にも神のさばきが来ることを未だ知りませんでした。

2. 天での喜び 18 : 20

20節はみ使いの呼びかけです。御使いは「天よ、聖徒たちよ、使徒たちよ、預言者たちよ。この都のことで喜びなさい。」と呼びかけました。大バビロンの滅亡は、地上の王たち、商人たち、海運業者たちにとっては悲しみでしたが、天には喜びが満ちるのです。なぜなら、神は聖徒たちのために、この都をさばかれたからです。6 : 10では殉教者たちのたましいが、神のさばきを求めて叫びました。神はその叫びについに答えられ、大バビロンをさばかれたのです。

3. 大バビロンの滅亡 18 : 21, 22

エレミヤは巻き物を石に結びつけて川に投げ入れ、バビロンの滅亡を表しました。(エレミヤ 51:63, 64) 同じように、ひとりの強い御使いが、大きい、ひき臼のような石を海に投げ入れて、大バビロンの滅亡を宣言しました。大バビロンが栄えていた時は、音楽家たちは音楽を奏で、あらゆる技術を持った職人は都の産業を栄えさせ、ひき臼の音が聞こえて、人々は日常生活を楽しみました。けれども、大バビロンが滅びることによって、もはや都では音楽は聞こえず、産業も人々の日常生活の営みもなくなってしまいました。大バビロンは完全に滅亡してしまうのです。

4. 大バビロン滅亡の理由 18 : 23, 24

もはや大バビロンでは、ともしびの光は輝けなくなり、暗黒に支配されます。結婚式の喜びもなくなり、苦しみと悲しみだけが支配します。御使いは神が大バビロンをさばかれた理由をここで2つ挙げます。一つは、大バビロンが周囲の国民を惑わし、罪に陥らせたからです。大バビロンは魔術をもって、人々に神を恐れることを忘れさせ、物質的繁栄のみを求めさせたからです。もう一つは、キリスト者を迫害し、多くの殉教者の血を流したからです。その罪の報いを大バビロンは受けて、滅びたのです。

1. 天における大群衆の賛美 19 : 1, 2

大淫婦が象徴する大バビロンが滅ぼされた後、ヨハネは天に大群衆の大きい声を聞きました。大群衆は多くの御使いたちのことと考えられます。御使いは「ハレルヤ。救い、栄光、力は、我らの神のもの。」と言って主を賛美します。「ハレルヤ」は「主(ヤハ)をほめたたえよ(ハレル)」という意味のヘブル語で、旧約聖書では詩篇に多く出て来ますが、新約聖書では黙示録 19: 1, 2, 3, 6 だけに用いられています。彼らの賛美の理由は、「神のさばきは真実で、正しいから」です。神は不品行によって地を汚した大バビロンをさばき、殉教者たちの血に対する報復をされたのです。

2. 24 人の長老と 4 つの生き物の賛美 19 : 3, 4

3 節では再び天の御使いたちが「ハレルヤ」と主を賛美しました。それは大バビロンからの煙が永遠に立ち上ることによって、大バビロンが永遠に滅ぼされたからです。すると 4 節ではそれに応答して、全聖徒を代表する 24 人の長老と全被造物を代表する 4 つの生き物が神をひれ伏し拝み、「アーメン。ハレルヤ。」と賛美しました。「アーメン」とは「真実、まこと、確か、本当」を意味するヘブル語で、ギリシャ語でも同じ意味で使われます。24 人の長老と 4 つの生き物は、御使いたちの賛美にアーメンと同調して、ハレルヤと主をほめたたえたのです。

3. 御使いと聖徒たちの賛美 19 : 5, 6

次に 5 節では神の御座から声が出ました。この声は御座で神に仕える一人の御使いの声と考えられます。彼はすべての神を恐れかしこむ聖徒たちに、神を賛美するように呼びかけます。それに答えて、6～8 節で全聖徒たちが主をほめたたえます。6 節の「大群衆の声、大水の音、激しい雷鳴のようなもの」とは全聖徒たちの声と考えられます。「われらの神である主は王となられた。」と言って、大バビロンの滅亡後に神が支配する神の国が樹立したことを理由に、ハレルヤと主をほめたたえました。

4. 小羊の婚姻 19 : 7, 8

すべての聖徒たちは、喜び楽しみながら神をほめたたえます。なぜなら、「小羊の婚姻の時が来て、花嫁はその用意ができた」からです。小羊はキリストであり、花嫁は全聖徒が属する教会のことです。「小羊の婚姻」とは、キリストが再臨される時、教会である全聖徒は復活、または携挙によってキリストのもとに引き上げられ、救いが完成し、新しい永遠の神の国で、キリストとともに過ごすことです。その時、キリストの花嫁は、「光り輝く、きよい麻布の衣」を着ることが許されました。その麻布とは「聖徒たちの正しい行い」です。この聖徒たちの正しい行いとは、彼ら自身の力によって行われたものではなく、キリストを信じる信仰により、神の恵みによって与えられたものです。

1. 小羊の婚宴 19 : 9

御使いはヨハネに「小羊の婚宴に招かれた者は幸いだ、と書きなさい。」と言ひ、また、「これは神の真実のことばです。」と言ひました。小羊イエスが再臨される時、小羊の婚姻の時が来て、キリストの花嫁は花婿キリストに迎えられ、小羊の婚宴に招かれて、永遠に天の御国で住むことができます。その神の永遠の救いの祝福にあずかる者はなんと幸いなことでしょうか。「幸い」という言葉は黙示録では全部で7回使われ、この箇所は4回目です。(1:3, 14:3, 16:15, 19:9, 20:6, 22:7, 14)「幸い」はイエスの山上の説教で語られた言葉でもあり、神の祝福にあずかる幸いです。「小羊の婚宴に招かれた者は幸いだ。」これは神の真実のことばなのです。

2. 神を拝みなさい 19 : 10

ヨハネは御使いの言葉に神の栄光を覚え、御使いを拝もうとして、その足もとにひれ伏しました。すると御使いは即座に「いけません」と自分を拝むことを堅く禁じ、「神を拝みなさい」と命じました。御使いと神の民は違う存在ではありますが、イエスのあかしを堅く保っている同じ神のしもべなのです。イエスをあかしする者は真の預言の霊を持っている者であり、御使いもヨハネも主にある兄弟たちも、ともにイエスをあかしする預言の霊を持つ神のしもべなのです。ですから、拝むお方はただ神お一人なのです。

3. キリストの再臨 19 : 11, 12

ヨハネが開かれた天を見ると、白い馬に乗っておられるキリストの姿を見ました。白色は勝利を表し、これはキリストの再臨の姿を表しています。キリストは「忠実また真実」と呼ばれる方であり、義をもってさばきをされ、悪と戦うために再臨されました。キリストの目は燃える炎であり、彼の前ではすべてがお見通しであり、何も隠すことができません。またその頭には多くの王冠がありました。王冠は支配権を表し、多くの王冠はキリストがあらゆるものを支配しておられることを表しています。それらの王冠には「ご自身のほかだれも知らない名」が書かれていました。これは神であられるキリストを、人間が理解し尽すことはできないことを表しているのです。

4. 血に染まった衣 19 : 13, 14

再臨のキリストは「血に染まった衣」を着ていました。これは15節にあるように、キリストが神の激しい怒りの酒ぶねを踏まれた結果、キリストの衣が敵の血によって染まったことを表しています。また、キリストの名は「神のことば」と呼ばれました。キリストはひとり子の神であり、キリストが語られたことばは「神のことば」です。キリストはご自身が語られる神のことばをもって、敵を滅ぼされるのです。キリストにつき従う天にある御使いの軍勢は、キリストの花嫁と同じ真っ白な、きよい麻布の衣を着ていました。御使いの軍勢の衣は血に染まっておらず、キリストお一人で敵と戦い、滅ぼしたのです。

1. 王の王、主の主 19 : 15, 16

再臨のキリストの口からは「諸国の民を打つために鋭い剣」が出ていました。これはキリストの口から出ることばのことです。キリストはご自身の力ある神のことばによって敵を滅ぼされるのです。またキリストが持たれる「鉄の杖」とは、キリストの力強い支配権のことで、キリストはすべての民を治めるお方であることを表しています。キリストが「神の激しい怒りの酒ぶねを踏まれる」とはキリストのさばきを表し、再臨のキリストは神にそむくすべての者を滅ぼされるのです。キリストの着物にも、ももにも「王の王、主の主」という名が書かれていました。この名前は 17:14 にすでに現れています。ヘンデルのハレヤコーラスは黙示録 19:6、11:15、19:16 のみことばから歌われています。

2. 神の大宴会 19 : 17, 18

ヨハネはさらに、太陽の中に立っているひとりの御使いが、中天を飛ぶすべての鳥に大声で叫ぶのを見ました。中天とは天の最も高いところです。御使いはすべての鳥に「神の大宴会」に集まるようにと言いました。この大宴会は、9 節の幸いに満ちた小羊の婚宴とは全く異なるもので、鳥たちが神に逆らう者たちの死肉を食べるというむごたらしい宴会です。神に反逆するあらゆる人々はキリストのさばきによって滅ぼされ、死体となって鳥に死肉を食われるのです。

3. ハルマゲドンの戦い 19 : 19

19 節はハルマゲドンの戦いのことが記されています。16:16 では、汚れた霊たちが地上の王たちをハルマゲドンに集めることが記されていました。そのとおり、反キリストの獣と地上の王たちとその軍勢がハルマゲドンに集まりました。そして白い馬に乗って再臨されたキリストと御使いの軍勢に戦いをいどみました。戦いの状況は記されていませんが、キリストは神のことばをもって、反キリストの軍勢を滅ぼされます。キリストに従う御使いの軍勢はキリストの背後にあって、キリストのさばきを見ていたのです。ハルマゲドンの戦いによって、悪魔の勢力は完全に滅ぼされるのです。

4. ゲヘナ 19 : 20, 21

ハルマゲドンの戦いによって、反キリストの獣ともう一匹の獣であるにせ預言者は捕えられました。このにせ預言者は「獣の前でしるしを行い、それによって獣の刻印を受けた人々と獣の像を拝む人々を惑わした」のでした。このふたりは「硫黄の燃えている火の池に、生きたままで投げ込まれ」ました。これは彼らが神のさばきを受けることを表しています。「硫黄の燃えている火の池」はゲヘナすなわち地獄のことで、神のさばきにより永遠に苦しみを受ける場所です。また獣に従った地上の王たちとその軍勢も、キリストの口から出るみことばの剣により殺されます。そして、「すべての鳥が、彼らの肉をあきるほど食べ」ました。こうしてキリストは完全な勝利を収められたのです。

1. 悪魔が千年間縛られる 20 : 1 - 3

ヨハネは、御使いが底知れぬ所のかぎと大きな鎖とを持って、天から下ってくるのを見ました。すでに反キリストとにせ預言者と彼らに従う者たちは滅ぼされましたが、悪魔はまだ生きています。底知れぬ所とは悪魔の住みかであり、御使いは悪魔を捕え、千年間縛って、底知れぬ所に閉じ込めました。そして、封印をして千年の終わるまで、悪魔が諸国の民を惑わすことのないようにしました。しかし、千年が終わると悪魔すなわちサタンは、しばらくの間解き放されます。そして、サタンは神に対して最後の戦いをいどむのです。サタンが閉じ込められる千年間は、地上に平和な時代がやってきます。その時代を千年王国と呼びます。千年は完全数であるので、神によって定められた期間という意味です。

2. 千年王国 20 : 4

ヨハネは多くの座を見ました。多くの座はキリストとともに支配する王座です。そこに19 : 11以下のキリストの再臨の時によみがえった聖徒たちが、キリストとともに王座に着きます。そして千年間キリストとともに王となって、地上を治めるのです。これが千年王国です。多くの座に着いた聖徒たちの中には、「イエスのあかしと神のことばのゆえに首をはねられた人たちのたましいと、獣やその像を拝まず、その額や手に獣の刻印を押されなかった人たち」がいました。これは、3 : 21の「勝利を得る者を、わたしともにわたしの座に着かせよう。」というキリストの約束の成就です。

3. 千年王国 20 : 5, 6

千年王国が始まる前にキリストが再臨され、その時に聖徒たちがよみがえる復活を第一の復活と呼びます。第一の復活にあずかるのはキリストに属する者だけであり、彼らだけが千年王国の特権にあずかることができます。その他のキリストに属さない者は、千年の終わるまでは生き返りませんでした。この第一の復活にあずかる者は「幸いな者」です。これは第5の祝福のことばです。また彼らはきよい麻布の衣を着せられた「聖なる者」でもあります。彼らにとっては、神のさばきを意味する第二の死は何の力も持ってはいません。彼らは千年間、祭司と王の職を与えられ、キリストとともに地を治めるのです。

4. 悪魔が解放される 20 : 7, 8

しかし、千年の終わりに、サタンは閉じ込められていた底知れぬ所から解き放されました。するとサタンは、「地の四方にある諸国の民、すなわち、ゴクとマゴグを惑わすために出て行き、戦いのために彼らを招集」します。ゴクとマゴグはエゼキエル38、39章の預言に基づく、神に逆らう悪の勢力を象徴しています。サタンが集めた民の数は、海辺の砂のように多い民でした。これは19 : 19のハルマゲドンの戦いの時に集まった軍勢よりも多く、サタンは自分に従う多くの軍勢によって、神との最後の決戦にいどむのです。

1. 悪魔の滅び 20 : 9, 10

悪魔の軍勢は、地上の広い平地に上って来て、聖徒たちの陣営と愛された都とを取り囲みました。愛された都は通常エルサレムを指しますが、ここでは象徴的に聖徒たちが集まる陣営の場所を指していると考えられます。そして、いよいよ悪魔の軍勢が聖徒たちの陣営に攻撃を仕掛けようとしたその時、天から火が降って来て、彼らを焼き尽くしました。彼らは何もしないままに滅ぼされたのです。そして、悪魔は火と硫黄との池に投げ込まれました。そこは神のさばきの場であり、すでに投げ込まれている獣とにせ預言者とともに永遠に昼も夜も苦しみを受けるのです。

2. 最後の審判 20 : 11

いよいよ最後の審判の時が来ました。ヨハネは、大きな白い御座と、そこに着座しておられる方を見ました。白色は聖さを表しています。大きな白い御座は神の審きの御座であり、そこにはキリストが着座されています。父なる神は、さばきを御子にゆだね、御子キリストによって最後の審判がなされるのです。(マタイ 25:31-33, ヨハネ 5:22, 27) 御座に着いておられる方の威厳により、地も天も逃げ去って、あとかたもなくなりました。これは、やがて来る新しい天と新しい地が現れる準備として、現在の天と地が消え失せたのです。現在の宇宙は、天地創造の始まりがあるとともに、新天新地が現れる前に終わりが来るのです。

3. 数々の書物といのちの書 20 : 12, 13

ヨハネは、すべての死んだ人が御座の前に立っているのを見ました。この時、13節に記されている、キリストに属さないすべての人が復活する第二の復活が起こるのです。キリストに属する者は千年王国の前に復活し、キリストに属さない者は最後の審判の前に復活し、すべての人が御座の前に立ち、キリストのさばきを受けるのです。キリストは各自の行いが記されている数々の書物といのちの書に従ってさばかれます。いのちの書に名の記されている者は、神の救いにあずかり、それぞれの行いに応じて報いを受けて新天新地に入れられます。一方、いのちの書に名の記されていない者は、キリストを信じなかったので、自らの行いに応じて神の永遠のさばきを受けるのです。

4. 第二の死 20 : 14, 15

最後の審判によって、死とハデスとは、火の池に投げ込まれました。その結果、死もハデスも無力にさせられます。ハデスは、キリストに属さない死者が最後の審判を待つ間、置かれる場所です。キリストに属する者のたましいは、死後すぐに天国に行くことができます。ハデスが火の池に投げ込まれるとは、ハデスにいた人たちが最後の審判によって、神の永遠のさばきの場所である火の池に投げ込まれるということです。これが第二の死であり、いのちの書に名の記されていない者はみな、火の池に投げ込まれ、永遠の滅びに至るのです。神のさばきの厳粛さを覚えるときに、私たちはキリストを信じて救われることがどれほど大切なことかを覚えさせられます。

1. 新天新地 21 : 1, 2

ヨハネは最後の審判の後、ついに新しい天と新しい地とを見ました。そこは救われた者たちが永遠に神とともに住むことができる場所です。以前の天と以前の地は過ぎ去り、もはや海もありません。ヨハネは、以前は存在したが、新天新地では存在しないものを7つ挙げています。それらは海のほか、死、悲しみ、叫び、苦しみ(21:4)、のろい(22:3)、夜(22:5)です。またヨハネは、新天新地にふさわしい新しい都が、神によって備えられ、天から下って来るのを見ました。それは、聖なる都、新しいエルサレムであり、夫のために飾られた花嫁のように整えられて、神のみもとを出て、天から下ってきました。

2. 救いの完成 21 : 3, 4

ヨハネは御座から出る大きな声を聞きました。それは御使いの声であり、彼は新天新地の説明をしました。神の幕屋とは神が臨在される所です。新天新地では神の幕屋が人とともにあるので、神は救われた民と共に住み、彼らは永遠に神の民となるのです。また神ご自身が彼らとともにおられて、彼らの目の涙をすっかりぬぐい取ってくださいます。彼らの目の涙とは、地上の生涯において流した涙です。新天新地には死もなく、悲しみ、叫び、苦しみもありません。なぜなら、以前のものが、もはや過ぎ去ったからです。その結果、人間の罪によってもたらされた地上の問題は、新天新地においてすべて解決されるのです。

3. すべてが一新する 21 : 5, 6

すると、御座に着いておられる方、すなわち父なる神が言われました。「見よ。わたしは、すべてを新しくする。」神は天地を一新することを再確認されました。さらに、「書き記せ。これらのことばは、信ずべきものであり、真実である。」と言われました。キリスト者は、このすべてを一新するという真実な神の約束を信じて、患難時代においても、希望をもって歩むべきなのです。また、「事は成就した。」と言って、神の約束は終わりの時にすべて成就することを保証されました。神は創始者(アルファ、最初)であり、完成者(オメガ、最後)なのです。また神は、渇く者にはいのちの水の泉から価なしに飲ませると言って、新天新地では神の祝福が惜しみなく与えられることを約束されました。

4. 勝利を得る者 21 : 7, 8

キリストを信じ、罪と死に対する勝利を得る者は、これらの新天新地における祝福をすべて相続することができます。なぜなら、神は勝利を得る者の神となり、彼は神の子となるからです。神の子どもは神の恵みを相続する特権が与えられるのです。一方で、キリストを信じず、救いを拒んだ人にとっては、永遠の滅びの場所が備えられています。「おくびょう者、不信仰な者、憎むべき者、人を殺す者、不品行の者、魔術を行う者、偶像を拝む者、すべて偽りを言う者」とは、神の律法を守らず、その罪を悔い改めず、キリストを信じなかった人です。キリスト者が救われるのは、罪を犯さなかったからではなく、罪は犯したけれども、キリストを信じて罪の赦しをいただいたからです。キリストの救いを拒んだ人は、火と硫黄との燃える池であるゲヘナに永遠に入れられるのです。この神の永遠のさばきを第二の死と呼びます。

1. 聖なる都エルサレム 21 : 9 - 11

七つの鉢を持っていた七人の御使いのひとりがヨハネに、「小羊の妻である花嫁を見せましょう。」と言いました。そして、御使いはヨハネを御霊によって大きな高い山に連れて行き、聖なる都エルサレムが神のみもとから来て、天から下って来るのを見せました。小羊の妻である花嫁とは聖なる都エルサレムのことであり、それは天に上げられた栄光の教会のことです。都には神が臨在しておられるので、神の栄光がありました。その輝きは高価な宝石に似ており、透き通った碧玉のようでした。救いが完成した栄光の教会は、神の栄光を反映させて光り輝いているのです。

2. 都の城壁と門と土台石 21 : 12 - 14

都には大きな高い城壁がありました。城壁は神が都を守っておられることを意味します。また城壁には12の門があり、都は正方形なので東北南西に三つずつ門がありました。これらの門には12人の御使いがおり、見張りをしていました。神の都には神によって許可された者だけが入ることが許されているのです。また門には12部族の名が書かれていました。これはエゼキエル48章でエゼキエルが見たエルサレムの町の幻に似ています。また、都の城壁には12の土台石があり、それには小羊の12使徒の12の名が書いてありました。これらが意味するところは、神の都、栄光の教会は旧約と新約のすべての聖徒によって形成されているということです。

3. 都の形 21 : 15、16

ヨハネと話していた御使いは、金の測りざおを持っていました。御使いはその測りざおをもって都とその門とその城壁を測りました。御使いが都を測ると、長さも幅も高さも同じ1万2千スタディオンであり、立方体でした。立方体は完全を表しています。また1万2千という数字は、7章の神の印が押されたイスラエルの各部族の人数と同じで、完全数ですので、これも神の都の完全さを表しています。また1スタディオンは185mなので、1万2千スタディオンは2220kmとなります。これは神の都の偉大さを表しています。

4. 城壁と都 21 : 17, 18

次に、御使いが城壁の高さを測ると144ペーキウスでした。人間の尺度と御使いの尺度が同じであると言われています。1ペーキウスは45cmですので、144ペーキウスは約65mです。144の数字も12の2乗ですので完全数です。城壁の高さも神の都が完全であることを表しています。城壁は碧玉で造られていました。城壁も神の栄光を表していました。また都は混じりけのないガラスに似た純金でできていました。都は神の栄光の輝きで満ちているとともに、非常に高価な材質でできていたのです。これは栄光の教会が小羊イエスの血という計り知れない代価をもって買い取られたキリストの花嫁であることを表していると考えられます。

1. 城壁の土台石と門 21 : 19 - 21

都の城壁の12の土台石はあらゆる宝石で飾られていました。土台石の宝石は、聖なる都の美しさを表しています。ここに現れる12の宝石は、大祭司の胸当てに付けられていた12の宝石に似ています。けれども個々の宝石名は一致しませんし、大祭司の胸当ての宝石には12部族の名前が1つずつ彫られていましたが、城壁の土台石には12使徒の名前が書いてあるという違いもあります。また、都の12の門は12の真珠でした。どの門も一つの巨大な真珠からできていました。真珠の門は都の美しさと豊かさを表しています。また都の大通りは透き通ったガラスのような純金でできていました。これは混じりけのない都の聖さを表しています。

2. 都の神殿 21 : 22

聖なる都エルサレムの中には、地上のエルサレムにあったような神殿はありませんでした。地上の神殿は神が人と会われる特別な場所でした。けれども天のエルサレムでは、万物の支配者である、神であられる主と、小羊イエスが都の神殿であり、都全体に神の臨在が満ちており、どこででも神とお会いすることができるのです。ですから、神とお会いする特別な場所である神殿は必要ありませんでした。聖なる都に私たちが行くとき、私たちはいつでもどこでも神と小羊イエスにお会いし、永遠に神とともに生きることができるのです。

3. 都のあかり 21 : 23 - 25

聖なる都には、これを照らす太陽も月もいませんでした。なぜなら、神の栄光が都を照らし、小羊が都のあかりだからです。やみを支配するサタンが完全に滅び、神の光が都を照らし、都には暗やみや影がないのです。新しいエルサレムでは、全世界の救われた民が、神の光によって歩みます。また救われた地の王たちは、王の王であられるお方に、すべての栄光を帰するために、自らの栄光を携えて都にやってきます。また地上のエルサレムでは、夜が来ると城壁の門が閉じられましたが、新しいエルサレムでは夜がないので、一日中決して閉じることがありません。都は神の栄光に満ちているのです。

4. 都に入る者 21 : 26, 27

救われた人々は、一日中開かれた門を通して、諸国の民の栄光と誉れを携えて都にやってきます。それはすべての人間の栄光と誉れを神にのみ帰するためです。しかし、天の都の門が一日中開かれているからと言って、だれでも都に入ることができるわけではありません。小羊のいのちの書に名が書いてある者だけが、入ることができるのです。都の12の門には12人の御使いがそれぞれの門を守っていて、いのちの書に名の記されていないすべて汚れた者や、憎むべきことと偽りを行う者は、決して都には入れませんでした。このことは、すべての人に対する神からの警告であり、いのちの書に名が記されるために、今、罪を悔い改めて、主イエスを信じるようにとの神の招きなのです。

22 : 1 - 7

1. いのちの水の川といのちの木 22 : 1, 2

聖なる都エルサレムには、水晶のように光るいのちの水の川がありました。その川は神と小羊イエスとの御座から出て、都の大通りの中央を流れていました。この川は、エデンの園の川(創世2 : 10)やエゼキエル47章の神殿から流れ出る川と関連があると思われます。新天新地はエデンの園と同じものではありませんが、エデンの園が回復した姿でもあるのです。川の兩岸にはいのちの木がありました。いのちの木もエデンの園にありましたが、神は罪を犯したアダムとエバがいのちの木の实を食べられないようにするため、彼らを園から追放されました。けれども新天新地では、人々は再びいのちの木の实を食べることが許され、その木の葉は人々に健康を与えました。

2. 神に仕えるしもべ 22 : 3, 4

新天新地は神の祝福が満ちているので、のろわれるものは何もありません。神と小羊イエスとの御座が都の中にあり、神のしもべたちは昼も夜も永遠に神に仕え、神を礼拝します。地上においては、神の御顔を見ることはできませんでしたが、聖なる都ではいつでも神の御顔を仰ぎ見ることが許されています。また神のしもべの額には神の名がついていました。彼らは小羊イエスの血によって、義とされ、神の所有の民とされたので、額に神の名が付けられているのです。獣の名が付けられた人々はみな滅びました。一方、神の名が付けられた人々は、地上では迫害に会いましたが、新天新地で永遠の祝福にあずかるのです。

3. 永遠の王 22 : 5

聖なる都には夜がありません。なぜなら、神である主が人々を照らされるからです。神の栄光が都を照らすので、ともしびの光も太陽の光もいりません。新天新地においては、神の民は永遠に王となります。千年王国では限定された期間、神の民はキリストとともに王となりました。しかし、新天新地では彼らは永遠に王とされ、王の王なるキリストからすばらしい特権をいただくのです。神はアダムが罪を犯したその時から、救い主による罪からの救いを約束されました。そして約束どおり、神は小羊イエスによる贖いを完成され、イエスの再臨により、エデンの園の回復を告げる新天新地を備えてくださるのです。

4. 信ずべき真実なことば 22 : 6, 7

御使いはヨハネに、「これらのことばは、信ずべきものであり、真実なのです。」と言いました。今までヨハネが見てきた幻と、そこで語られた神のことばは、私たちが信ずべき真実なことばなのです。神は御使いを遣わし、すぐに起こるべき事を、新約の預言者の一人であるヨハネを通して、神のしもべたちに示されました。これらの預言のことばがいつ成就するか私たちにはわかりませんが、すぐに起こるべき事との緊迫感を持ちながら、神のことばに従うことが大切です。主は言われます。「見よ。わたしはすぐに来る。この書の預言のことばを堅く守る者は、幸いである。」これはキリストがこの書で語られる7つの幸いの第6番目のことばです。再び来られる主を待ち望み、その時まで、主のことばを堅く守る者となりましょう。

1. ヨハネの証言 22 : 8, 9

ヨハネは、神が御使いを通して今まで啓示されたことを見聞きしてきたのは自分であると証言しました。その神の啓示があまりにも偉大であったので、それらのことを示してくれた御使いの足もとにひれ伏して、拝もうとしました。それに対して御使いは、自分はヨハネと同じ神のしもべであることを告げ、神を拝みなさいとヨハネに命じました。ヨハネはすでに19 : 10で、同様に御使いを拝もうとし、御使いから神を拝みなさいと命じられていました。御使いは近くで神に仕えてはいても、神ではなく、神のしもべです。ヨハネに示された啓示も、神が御使いを通して示されたのです。ですから、ヨハネは神のみを拝むべきであり、御使い礼拝は禁じられているのです。

2. 時が近づいている 22 : 10, 11

御使いはヨハネに、「この書の預言のことばを封じではいけない。時が近づいているからである。」と言いました。主イエスが再び来られる時が近づいている今、すべての人々が神のことばを聞くことができるように、公開されなければならないのです。御使いはまた、時が近づくにつれ、各自がおのおの自分の決めた道を進むようにと命じます。悔い改めることをしない不正な者や汚れた者は、ますます心かたくなになり、不正や汚れた道を歩むようにと伝えます。一方、悔い改めてキリストの救いにあずかった聖徒は、いよいよ正しさと聖さの道を歩むようにと伝えます。キリスト者は天で信仰が完成するとしても、地上にあっては、絶えず信仰の成長を求めなければならないのです。

3. 再臨の約束 22 : 12, 13

キリストは7節に続いて、「見よ。わたしはすぐに来る。」と再臨の約束をされます。そして再臨の理由を、「わたしはそれぞれのしわざに応じて報いるために、わたしの報いを携えて来る。」と告げられます。キリストの再臨とそれに続く最後の審判において、キリストは救われた者には、地上の働きに対する報いを与えてくださるのです。キリストは父なる神と同様に、すべてのものの創始者(アルファ、最初、初め)であり、すべてのものの完成者(オメガ、最後、終わり)である神です。(21 : 6)

4. 神の完全な幸い 22 : 14, 15

14節には、黙示録で記された7つの幸いの最後のことが記されています。自分の着物を洗うとは、キリストの血によって罪がきよめられることです。その人には、いのちの木の実を食べる権利が与えられ、そのために門を通して聖なる都に入れるようになるのです。それは永遠で完全な神の祝福による幸いです。一方、都に入れない者はその幸いを得ることができません。「犬ども(悪人)、魔術を行う者、不品行の者、人殺し、偶像を拝む者、好んで偽りを行う者」とは、自分の罪を悔い改めず、キリストを救い主と信じなかった人々です。彼らは都に入ることができず、神が備えられた永遠の幸いを得ることができないのです。

1. ダビデの根 22 : 16

ヨハネの黙示録に記された啓示は、イエスが御使いを遣わして、諸教会について証したものです。イエスはご自分がダビデの根であり、ダビデの子孫であると言われます。旧約聖書では、救い主はエッサイの根と呼ばれますが、黙示録ではキリストをダビデの根と呼びます。(5:5) また子孫という言葉は、旧約聖書において一貫して来るべき救い主を表す言葉です。キリストがダビデの子孫であるとは、神が約束通り、救い主をダビデの家系の中からお与えくださったことを表しています。また、イエスは輝く明けの明星です。迫害の暗黒の時代の中でも、やがて明けの明星であるイエスが来ると夜が明けて、輝く永遠の御国が来るのです。イエスこそ神の民の希望なのです。

2. 来てください 22 : 17

御霊もキリストの花嫁である教会も、イエスを待ち望んで「来てください。」と言います。これは、7節と12節の「見よ。わたしはすぐに来る。」というイエスのことばへの応答です。ヨハネはさらにこの書のことばを聞く者は、「来てください。」と言いなさいと、主の再臨を待ち望むように勧めます。そして、まだキリストの救いを受けていない者に対して、「渇く者は来なさい。いのちの水がほしい者は、それをただで受けなさい。」と招き、まずキリストのもとに来るようにと勧めます。キリストの救いを受ける時に、私たちは主の再臨を待ち望む者となることができるのです。

3. 神の啓示の完全性 22 : 18, 19

ヨハネはこの書を閉じるにあたり、読者に次の警告を与えます。まず、この預言の書に付け加える者があれば、この書に書いてある災害をその人に加えるという警告です。次に、この書から少しでも取り除く者があれば、神はいのちの木と聖なる都の祝福をその人から取り除くという警告です。神の啓示は完成されたものであり、そこに付け加えたり取り除いたりすることは、神の啓示の完全性を否定することになるのです。神のことばを信じない者は、神の救いにあずかることができないのです。このヨハネの警告はヨハネの黙示録に当てはまるだけでなく、聖書全体に当てはまる警告です。

4. 主イエスの恵み 22 : 20, 21

「これらのことをあかしする方」とはイエス・キリストです。イエスは聖書の最後の書物となる黙示録を、御使いを通してヨハネに示し、ヨハネが書き記して、私達に与えてくださいました。そのイエスが最後に言われます。「しかり。わたしはすぐに来る。」「しかり」はイエスの約束が真実であることを表しています。イエスは22章において3回「わたしはすぐに来る。」と言われました。イエスの再臨は、この書の最初(1:7)から最後まで記されている大切な神の約束です。これに対するすべての聖徒の応答は、「アーメン。主イエスよ。来てください。」です。「アーメン」は、イエスのことばに対する確信に満ちた同意です。ヨハネは最後に、「主イエスの恵みがすべての者とともにあるように。アーメン。」と祝福を祈って、この書を閉じました。これは聖書全体を閉じるにあたっての神の祝福の祈りでもあります。聖書を信じるすべての者に主イエスの恵みがありますように。アーメン。主イエスよ。来てください。